Teary Tale

真辺よっぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｅａｒｙ Ｔａｌｅ

【Ｎコード】
Ｎ４９８４Ｉ

【作者名】
真辺よっぴー

【あらすじ】
――舞台は遥か遠い場所にある雪の大地。そこに住む小さな子供たちによって繰り広げられる物語。ちょっと気が弱いけど、誰よりも純粋で素直な少年、物語の主人公ププ。ちょっと気が強いけど、みんなのことを想う心は誰にも負けない小さな少女ペペ。ププとペペをまとめる、いつもにこやか、優しいお兄さん役の頼れる少年ポポ。この３人が織りなす、友情と勇気と涙の、心温まる小さな小さな物語。

第1話　物語のはじまり

この物語の舞台は、誰にも知られることのない遥か遠くの北の大地。長い冬と短い春が交互にやってくるという単純な気候で、今は長い長い冬の季節です。

今日もいつものように雪がちらほらと降っていましたが、途切れた雲の隙間から日が差していて、気温はマイナス５℃。いつもと比べるとそんなに寒くはありません。だっていつもは軽くマイナス１０℃は越えていますから。

そんな北の大地の真ん中に、小さな小さな集落がありました。村と呼ぶにはあまりに小さすぎる、本当に小さな小さな集落です。１つ１つの家は森の太い丸太を組み合わせて出来た素朴な造りでしたが、それでもこの冷たい冬風をしのぐには十分な構造となっていました。

太陽が西に僅かに傾いた頃、その中の１つである家の扉が開きました。中から出てきたのは、小さな少年でした。年は１４か１５歳くらいでしょうか。まだまだ幼い顔立ちで、まるで大人になることを拒み続けている小鳥のような、そんな顔つきをしています。

それとは裏腹に少年の身に付けているものは、何やら重々しいものばかりでした。厳しい寒さに耐えるためか、何かの動物らしき毛皮のコートに、毛皮のフードを被っています。そして、背中には彼の背丈ほどの長々とした弓と矢を担いでいました。

ちらほらと舞っていた雪はいつしか止み、空には冬の寒さに負けじと輝いた太陽が顔を覗かせています。少年は大きく伸びをして、降り積もった雪の上に小さな足跡を残しながら歩いていきました。

少年の名前はププ。この雪に閉ざされた集落に住む、数少ない住民の１人でした。

第2話　寒い土地に住む子供たち

ププは自分が住む家とは５０メートルほど離れている、お隣さんの家へと向かっていました。

家に着き、扉の前に立ってノックをすると、威勢の良い声と共に元気溢れる少女が中から出てきました。

「遅いじゃないのよ、ププ！　もうお昼を過ぎてるじゃないのよ。また寝坊しちゃったわけ？」

少女はププと同じ年くらいでした。背の高さもププと同じくらいです。

「ごめんぺぺ。昨日ちょっと遅くまで起きてたから、今日は寝坊しちゃったんだよ」

ぺぺという少女の剣幕に、ついつい本当のことを言ってしまうププはとても正直者です。でも、それが逆にぺぺの感情に油を注いでしまいました。

「そんな遅くまで起きてただけで寝坊しちゃうようなら、ププはご飯を食べられなくなっちゃうじゃないの！　この前だって、寝ぼけながらアザラシを採ろうとしたら、氷の上で滑って自分が網に絡まってたじゃない。もうポポは先にカリブー（トナカイだよ）狩りに行っちゃったんだよ。またポポにご飯を分けてもらうの？」

今のぺぺの言葉に出てきたポポという少年も、ププのお友達です。今の言葉からわかるように、ポポはとても狩りが上手いのです。運動音痴で狩りが苦手なププは、よくポポから食料を分けてもらったりしていました。でも、いくら狩りをやってもなかなか上達しないププは、いつもぺぺに怒られてしまう羽目になるのです。

この寒い大地では、野菜や果物を育てるのは難しく、冬の間は森や雪原などに行ってカリブーを捕まえたり、海岸に行ってアザラシやお魚を捕まえて食べるしかありませんでした。この子供たちは、なかなか大変な土地に住んでいるのです。

「とにかく、グズグズしてないで西の方にある雪原にいくよ。もしかしたらもうポポはカリブーを捕まえているかもしれないんだから」
「う、うん！」
ププは小さく頷きながら、ぺぺと一緒に、雪がきらきら光る道を西の雪原へと向かいました。

第3話　カリブー狩り

目の前には、一面に白銀の絨毯が敷かれたような白色。細かな雪は風に優しく撫でられながら宙を漂い、一陣の波となって流れ消えてゆきます。ところどころに盛り上がった雪山は、岩に降り積もった雪によって出来たものです。小さな雪山もあれば、小高い丘のような雪山もありました。

２人がその西の雪原に辿り着くと、広大なる光景にしばし見とれてしまいました。太陽は心地よい温かさを与えてくれ、氷点下の大地に僅かながら温もりを残してくれます。

しかし、ほっとしたのも束の間、雪原の中央にカリブーの群れを確認したペペは、

「ほら、ププ！　あそこにカリブーの群れがいるから、弓矢の準備をして」

と、面白い物を発見した幼子のような声でププを急かせます。

「う、うん、わかった」

答えながら、ププは背中の弓を取り出しました。

２人は息をひそめながら、ゆっくりとカリブーの群れへと近付いてゆきます。ププは弓を構えながら、ペペの前を歩きます。やがて、カリブーに気付かれるか気付かれないか、そんな距離まで近付いた２人は、雪山の陰に身を潜めました。

カリブーの群れは、１０数頭の小規模なものでした。大きなものもいれば、まだまだ小さな子どものものもいます。カリブーたちは、大きな蹄で雪を掘り返し、その下に生えた何かを食べようとしている様子です。

「ププ、矢を用意して」

ペペは慎重に群れを観察しながら、小声で言いました。

ププは初めて弓矢を触るようなぎこちない手付きで、矢を構えました。矢を構える腕が、小刻に震えています。それは、矢をひく力

がないからなのか、動物に矢を射るのが怖いからなのか、ププ自身にもわかってはいませんでした。
ププはカリブーたちの群れの中心に標準を合わせながら、どのカリブーを狙うかを定めていました。確実に矢を当てるためには、動きの遅いものを狙った方が高確率に決まっています。ププは集中してカリブーを観察し、１匹だけ、何故か動きが散漫なものを見つけ出しました。
そのカリブーに矢を向けながら、なんでだろう？　と疑問に思ったのも一瞬、ププははっとしてあることに気付きましたが、
「今よ！」
ぺぺの小さな叫びに驚き、矢を持つ手の力を緩めてしまいました。
同時に、ひゅ、と風を切る鋭い音が耳を裂き、矢はカリブーの群れの中心へと放たれました。
カリブーの群れは列を乱された蟻たちのように慌ただしくなり、２人の存在に気付いてしまいました。ププたちから逃げようと移動し始めるカリブーの群れを前に、ぺぺは雪山の陰から飛び出しました。ププが放った矢が、どのカリブーに命中したのかどうかを確かめるためです。
しかし、矢はカリブーではなく、白い雪の上に斜めに深々と突き刺さっていました。
「もう！　ププのドジ！　せっかくすぐにカリブーの群れを見つけられて、今が仕留める絶好のチャンスだったのに、矢がカリブーに命中してないじゃないのよ」
「いや、違うんだよ。あの中に――」
「言い訳はいいから。早く追うのよ。カリブーを仕留めないと、ププの今日の晩御飯はナシにしちゃうんだから」
ぺぺがかんかんになってププを怒っている間にも、カリブーたちの群れは素早く移動を始め、雪けむりを激しく立ち上らせながら雪原の向こうへと走っていきます。カリブーたちの足の速さは結構なもので、人間なんかが走って追い付ける速さではありません。

あっという間に雪原の向こうに姿を消したカリブーたちが残したものは、もうもうと霧のように立ち上る雪けむりと、数多くの蹄の跡、雪や土を掘り返したあとに出来たその山でした。
「あー。もうカリブーたちが見えなくなっちゃった。ププの馬鹿！」
ぺぺは名残惜しそうにカリブーたちが去った痕跡を見つめながら、ププにふんと鼻を鳴らして言いました。
「ぺぺが文句言ってるからだよー」
というププのさりげなくトゲの刺さるような呟きに、
「なんですってー？」
と負けじとトゲのある目つきで詰め寄るぺぺ。
ちょうどその時、
「なんだ。やっぱりププとぺぺじゃないか」
2人の雰囲気とはうって変わったほのぼのとした声がしてきました。
不意に声をかけられたププとぺぺは、驚きのあまり、一瞬誰が声をかけてきたのか、理解が出来ていませんでした。
目の前に立っていたのは、ププとは少しだけ背が高いひょろりとした、にこやかで温和そうな少年です。彼に笑いかけられると、こちらも釣られて微笑みが溢れてしまいそうな、そんな空気を持っていました。
「ポ、ポポ！」
ププとぺぺの両方が同時に叫びました。彼は2人のお友達である、ポポでした。
ポポは、手に持っていた弓と矢を背中へとしまいながら、
「ボクも今、ここにいたカリブーの群れを狙っていたんだけど、こっちが矢を放っていないのに突然逃げ出したから、なんでだろうと思っていたんだよね。ププも同じ群れを狙っていたんだなぁ」
と、能天気にゆっくりとした口調で言いました。
「ごめん、ポポ。僕が失敗したせいでカリブーがみんな逃げちゃった」

「そうよ、ププ。ププの弓の腕が未熟だからこんなことになったんだから！　ポポに謝りなさい」
と、ペペは頬をぴしゃりとぶつように厳しく言いました。
「あはは。いやいや、ププのせいじゃないよ。カリブーは素早いから元々狩りが難しいし、今回この雪原にいた群れの数も少なかったからね。あと、何故かは知らないけれど、あのカリブーの群れ、妙に警戒心が強かったから」
ポポはさっきまでカリブーの群れがいた場所まで歩いていくと、雪や土を掘り返した痕跡をじっくりと観察し始めました。ププとペペもそれに続きます。熱心に観察をしているポポを、２人はただ黙って見守っていました。
ププとペペは、見ての通り、まだまだ狩りに関しては未熟者で、なんでもかんでもポポに頼ってしまいがちです。ペペはププに対してきつく言ってはいるものの、内心はまだポポがいなければ、ププだけの狩りは難しいと思っていました。
何しろポポはもう１６歳。ププとペペはまだ１４歳。２つばかりお兄さんであるポポは、この寒い厳しい土地に住む２人にとっては、とても大きな存在であるのです。
ポポは雪や土などを見ながら、
「カリブーたちは、雪の下に生えてる地衣類（コケみたいな植物だけど、菌糸類だよ）を食べてたんだなぁ。冬の間は彼らにとっても食料を探すのも一苦労だから、きっとすぐ近くの雪原に移動しただけだと思う。同じように雪を掘り返しているはずだから、その時を狙って仕留めよう」
と言いました。そして、カリブーの群れが移動していった先を見つめました。
「さすがポポね」
ペペが素直に感心しながら言います。
ププはと言うと、ポポのことを尊敬しながらも、なんだか胸の中で、一本の黒い線がぐちゃぐちゃと動き回っているような感じがし

ていました。複雑で、気持ち悪いような感情です。
「やっぱりポポは凄いな……」
ププはようやくそれだけを小さく呟きました。
「当たり前じゃないの、ププ。ププなんかとはポポは違うのよ」
ぺぺは、ププの小さな呟きを遮るように言いました。
ププはなんだか悔しい気持ちになってしまいましたが、ポポに対してそのような気持ちを抱いたのは初めてで、自分でもよくわからない感情でした。誰にも負けたくないという気持ちと、頑張らなくてはいけないという気持ちが重なり合い、ププに重くのしかかっているのでした。
と、その時、ポポは遠くを見つめていると、あることに気が付き、ふと眉をひそめました。
カリブーたちが移動していった方向とは真逆の方向、太陽の角度から考えると、ほぼ東の方向です。何やら、空の低い位置に深く立ち込めた灰色の雲が出現していました。雪原を囲むように存在している高く連なった山々は、薄い膜を張り付けたように霞がかっています。
「ププ、ぺぺ。今日はもう帰った方がいい」
ポポが静かに言いました。
そのポポの冷静な言葉に反応したように、3人を突き抜けるような風が雪原を横断していきました。細かな雪が頬をパラパラとぶつように撫でていき、やがて、先ほどまで元気だった太陽が輝きを失い、辺りに憂鬱を混ぜ込んだような薄暗い空気が漂いました。
「……一荒れありそうだな。あとはボクがカリブーたちを追うから、2人はもう家に帰っておとなしくしていた方がいいな」
ポポは着込んでいたコートをきつく締め直し、毛皮のフードをもう一度深々とかぶり直しました。
「え！　そんな……。ポポは大丈夫なの？」
弓を雪に突き刺し、ぴんと張り直しているポポの様子を見ながら、ププは心配そうに言いました。

そんなププに対し、ポポはにやりと笑い、
「ププも心配性になったな。ボクの狩りの腕は、ムーおじさんにも負けないことを知ってるだろ？　前にも吹雪の中、カリブーを仕留めてきたことがあったじゃないか。だから今回も大丈夫。心配しなくてもいいよ」
と、いつもの口調で言いました。
「そうね。その方がいいよね。そうしましょう、ププ」
ぺぺがププに言いましたが、それはなんとなく自分自身にも言い聞かせているようにも聞こえました。
ぺぺの切り替えの早さには驚いたププでしたが、やっぱりポポが一人でカリブー狩りを続けることを受け入れてしまうのは、なかなか納得がいかないことでした。しかし、かと言って、自分がポポの手伝いをしようとしても、恐らく足手まといにしかならないだろうということも、ププ自身が一番よくわかっていました。
「……わかった。家で待ってるよ」
とププが渋々了解し、ポポに言いました。
「気を付けてね、ポポ」

第４話　吹雪の中で

辺りが夜の闇と静寂とに満たされる頃、それとは対称的に、雪と風の勢いはうねりと轟音を伴って激しさを増してきました。

この雪の大地では、冬の間の天候が非常に変わりやすく、昼間は雲１つない晴天だったとしても、夜には前が見えない程の猛吹雪に見舞われることなんかは良くあることでした。

季節の４分の３が冬に当たるこの土地で、天候の変わり目を事前に見極めることは、常人にとって白い雪の中で白い綿毛を見つけるくらい至難の業（わざ）です。一度天候が荒れると、１週間以上太陽の光を浴びることが出来ないということも稀にありました。

そのため、この土地に住む人々が、狩りをして食料を手に入れるということは、まさに死活問題となりうることなのです。

ププとペペは、ポポに言われてからすぐにそれぞれの家に戻り、彼の帰りを待ち続けていました。暖をとりながらププは、その前にある机の前に座り、小さな格子窓から外の様子を伺っていました。

暗い景色の中から現れる白い固まりは、暴れ狂ったように途切れることなく、窓の外側をぴしぴしと鞭のように叩いています。時折、巨人のイビキのような風が格子を乱暴に揺らし、ププを驚かせていました。

ポポがカリブーの跡を追って狩りを再開し始めたのと、天候が少しずつ荒れ始めた時間はほぼ同じでしたが、それから既にもう５時間程も経過していました。荒れ具合は時間に比例しながら激しさを増しています。

「ポポ、大丈夫かなぁ……」

心配という言葉を吐き出すようにププが呟き、風と雪まじりの轟音が吹き荒ぶ中、入り口の扉を乱雑に叩く音が響いたのは、まさにその時でした。

ププは始め、風によって雪の粒が扉に叩き付けられているのかと

思っていましたが、それとは様子が違うということにすぐに気付きました。
扉の前に行き、それを開けると同時に、風の低い唸りと共にぴしぴしと凍てついた空気が部屋の中に入り込み、ププは息が詰まりました。
思わず顔をしかめるププでしたが、扉を叩いていた主はそれに構わず扉を開くやいなや、
「ププ！　ポポがまだ帰ってきていないの！」
と、暴風の音に負けない声で叫んできました。それは全身が雪まみれになったペペでした。彼女は雪が体にまとわりついているのも忘れている様子で、ププの家の中へと入り込みました。家の中の暖かい空気が、ペペの頬を濡らします。
「どうしようププ。もう5時間以上も経ってるし、吹雪は段々と酷くなってきてるし、このままじゃ……。いつもならこんなに吹雪になる前にはポポは戻ってくるはずなのに、どうしよう……」
ペペはかなり慌てていて、今にも泣き出しそうな声でププにすがりついてきました。ププはそんなペペの様子と、外の激しく荒れている様子を見比べながら、自分を落ち着かせようと頑張りました。
「ペ、ペペ。落ち着いて」
と、ププは静かに言いました。それは自分自身を落ち着かせるためのおまじないのような言葉でもありました。
「この時間から僕たちがポポを探しに行くんじゃあ、とても危ないよ。暗いし、ほら、雪や風も凄いし。第1、ポポがどこに行ったのかまるでわからないんだよ。僕の力で何が出来るかって言っても……。他に誰か、助けを誰か呼ばないと……」
ププはなるべく冷静に、自分が出来うる最大限の行動を考えながらペペに言いました。
自分の出来ることは何か、その問いに対する答えは、？今はまだ？1つしかありませんでした。
「ムーおじさん。イグルーの洞穴（ほらあな）に住むムーおじさんに助けを求め

ようよ。そしたら、ポポもきっと見つけられるハズだから」
　ププは言葉を震わせないように、ペペに心配をさせないように、精一杯言葉に力を込めて言いました。それが、ププに出来る最大限のことでした。
　ムーおじさんは、ププ、ペペ、ポポの3人にとっての保護者的な存在であって、とても頼れる大人のおじさんでした。狩りの腕は勿論、生活の知恵・知識はたくさん携えており、様々な技術も持っているのです。遥か東の島国の？ケンドウ？や？ジュウドー？と呼ばれるものの？ユウダンシャ？であるとよく聞かされていて、要するにとても強くて頼れるという人であるということを、ププはよく知っていました。
「さ、急いでムーおじさんの所に行こう！」
「……わかった」
　ププの掛け声に、ペペは素直にこくりと頷きました。
　ププとペペは未だ雪の勢いが増してきている夜の雪道を、雪まみれになりながらも、吹き荒ぶ強い風に負けないように2人寄り添いながらムーおじさんの住む洞穴へと向かいました。
　そのイグルーの洞穴は、小高い丘の中腹にあるププとペペの家から、やや下った場所にありました。いつもなら2、3分でそこに到着するのですが、とても強い吹雪のせいで、１０分以上もかかってしまいました。
　入り口が降り積もった雪によって少しだけ狭くなっていましたが、2人が入るには十分すぎる広さでした。降り積もった雪を軽く踏みしめながら、2人は中へと入りました。
　洞穴の中は、雪と言うよりは氷の塊を削ってドーム状に積み上げられた、頑丈な外壁によって作られていました。氷を削って作ってあるとは言っても、外の寒い空気と強い風を遮断出来るためか、中は暖い空気で満たされていました。
　少しだけ進むと、岩盤を掘った2つの洞穴へと繋がっていました。右手の洞穴からは、ゆらゆらとオレンジ色の灯りが溢(こぼ)れているのが

見えます。そこがムーおじさんがいる場所でした。
ププとペペは、洞穴の奥にある灯りに導かれるように、真っ直ぐと歩いて行きました。
灯りが溢れた部屋からは、パチパチと炭のはぜるような音が聴こえ、オレンジ色の光が濃くなっていくごとに空気が暖かくなってきました。中の空洞はとても広くて大きく、ププやペペの背の高さでは天井に手が届かないほどでした。時折、岩の先っぽから冷たい水がぽたぽたと滴り落ちています。
洞穴の一番奥の、何かの動物の毛皮が敷きつめられている上に、小さな丸太を切り出して作られた椅子がありました。そこに、大きな背中を丸めて作業をしている人間の姿があります。ゆらゆらと焚き火の炎が陽炎のようにゆらめく中、木を削る音が規則的に響いていました。
「ムーおじさん！」
その姿を確認したププが、思わず声を上げました。洞穴の中に高い声がこだまします。
「……ん？　おぉ、なんだププとペペじゃないか。どうした、こんな夜更けに」
突然のププの声の張り上げにも全く動じることもなく、大きな背中はくるりとゆっくり向きを変え、代わりに黒い豊かな髭を携えたごつごつした顔がこちらを向きました。髭面で、鋭い目つきが全てを射止めるような、いかつい顔をしたおじさんです。彼がムーおじさんでした。
「ムーおじさん。ポポが、ポポが……」ペペが涙声混じりに叫びます。「カリブー狩りに行ったまま帰ってこないの。もうかれこれ5時間も経つのに、雪の勢いは増してきてるのに、全然帰ってくる気配がないの。このままだったら……。助けて、ムーおじさん！」
ペペの言葉を聞いたムーおじさんは、一瞬怪訝そうに眉をひそめましたが、珍しくうろたえたペペの様子に、目を見開いてひどく驚いた表情を見せました。

「なにっ？　確かにそれは一大事だ。ポポに限って、滅多なことはないかと思うが……、どちらにしろ放ってはおけないな。わしが急いで探しに行ってみることにしよう。
ププ、ポポはどっちの方向にカリブーを追って行ったかわかるか？」
ププを横目に話しながら、ムーおじさんはコートやらフードやらを小慣れた様子で、既にもう準備し始めています。
「えっと……。太陽が沈む方角だったから、西の方に向かって行ったと思う」
「とすると、カリブーたちが向かって行ったのは西の岩山の方角か。ポポもそっちに向かって行ったとは思うが、確かにカリブーたちの住処があったような気がするな。さすがにこの悪天候の中、西の岩山までは登ってないだろうが、とにかく、行ってみないことにはどうしようもないな」
フードの紐をきつくきつく締め、ムーおじさんお手製のゴーグルを手に取り、そして革長靴を雪が入り込まないようにきつくきつく縛りました。
テキパキと準備を完了していくムーおじさんを見ながら、ププはぐっと拳を握り締め、
「ムーおじさん。僕も一緒にポポを探すよ！」
と、意思をそのまま固く吐き出したように言いました。
その言葉に一番驚いたのはムーおじさんではなく、ププの隣にいるペペでした。
「ちょっと、ププ、何を言ってるのよ！　ポポの狩りのお手伝いも出来ないププが行っても、ムーおじさんの邪魔になるだけじゃないの！」
またもやペペは、小さな肩を震わせて怒ったように言います。
しかし、ムーおじさんはププの言葉に驚いた様子もなく、ただ黙ってププの側に近寄って来ました。そして、ププのまだ幼い目線に自分の目線を合わせました。

「ププ。西の岩山の周りには、昔からわしがみんなに話しているように、恐ろしい雪の怪物がいる。獰猛で危険な、人を食べたりもする怪物だ。このことは、知ってるよな？

それは今回はあまり関係ないかもしれないが、それほど、わしと一緒にこの暗い吹雪の中、ポポを探しに行くというのは危なくて大変なことなんだ。この土地の長い冬に突然訪れるこの吹雪は、特にたちが悪い。この土地を熟知したわしが1人で行くにしても、少々危険なことだ。雪で方向がわからなくなったり、視界が悪くて、うっかり崖か何かに足を踏み入れてしまうかもしれない。それは突然のことだから、まだまだ未熟なププを守ってやれないかもしれないし、もしかしたらププが自分で自分の身を守らなくてはならない場面もあるだろう。それが、この雪国に住む人間にとっての最低限のルールであるし、絶対的なことだ。そのことをププは十分に理解しているか？」

ププはムーおじさんの目線から、自分の目線をそらさずに、ただ黙ってこくりと力強く頷きました。ププの瞳はただ真っ直ぐ、ムーおじさんの瞳を見つめていました。

その瞳に、ププの覚悟と理解の全てを察したムーおじさんは、

「そうか。わかった。それを理解しているのであれば、もう何も言わん。すぐに、支度をするんだ」

といって、にやりと笑みを溢しました。

ププは再び力強く頷くと、すぐに羽織っていた毛皮のコートとフードの紐を深々と締め直し、吹雪と寒さに対して抵抗できるようにしました。

ムーおじさんは、ププの姿を見てうんと頷きました。そして、ププを心配そうに見つめているペペの方を見て、小刻に震えている頭を大きな手で優しくぽんぽんと撫でました。ムーおじさんの手はごつごつととても大きく、ペペの小さな頭はすっぽりと隠れてしまいます。

「ペペ。そんなに心配するな。ププにはなんだかんだいろいろと言

ったが、このわしが付いている。ププも、わしが思っている以上にいつの間にか成長してるみたいだしな。
あのポポに関しても、彼のことだ。吹雪で危ないと思ったら、それ相応の対策もとっているだろう。なに、すぐ帰ってくるさ」
ププとムーおじさんは、暖かな洞穴を背に、氷の塊で積み上げられたドームを抜け、洞穴の出口へと向かいました。
そこまで来ると、びょおびょおと耳にまとわりつくような風の音とともに、体を突き抜ける寒さが2人を襲いました。外の様子を見ていなかったのはほんの数分だったのにもかかわらず、さっきよりも吹雪の勢いが増しているようにププは思いました。
「こりゃあ、想像以上の酷い風と雪だなぁ」ムーおじさんがおもむろに呟きます。「思ったより、ポポの捜索は大変になりそうだ……」
ププは顔に次から次へと当たる固い雪に負けないように、まだ小さな拳の勇気を、溢さないように力いっぱい握り締めました。
「ムーおじさん！　僕、足手まといにならないように、精一杯頑張るよ！」
風の音にかき消されないように、ププは精一杯声を張って叫びました。
「おう」ムーおじさんはにやりと、唇の端を上げます。「期待してるぞ、ププ」
「ムーおじさん、気を付けてね。ププも……、気を付けて」
振り返ると、すぐ後ろにはペペが見送りに来ていて、2人に祈るような声で言葉を送りました。その言葉にププはこくりと頷き、そしてまた真っ直ぐ前を向きました。
暗闇の中でも白い雪はくっきりと映(は)えていて、逆にそれが不安と恐ろしさを象徴しているようでもありました。不安と恐ろしさが途切れることなく続く闇の向こうに、自分が吸い込まれてしまいそうです。今にも風の音は、ププの握りしめた小さな勇気をバラバラにしてさらい、雪の冷たさは元気をじわじわと奪ってゆきそうです。ププは、ついつい妙な考えが頭をよぎってしまい、ぞくりと冷たい

手で背中をなぞられたように、体を震わせました。
　そこでププは、暗闇の向こう側の方の妙な違和感に気付きました。そして、目を大きく見開きました。
「さて、これ以上吹雪の勢いが増さないうちに、まずは西の雪原へと向かうぞ」
「ムーおじさん、ちょっと待って！」ムーおじさんの言葉を遮り、ププは唐突に声を上げました。「向こうに、吹雪の向こうに何かがいる！」
「なんだって？」
　眉をひそめるムーおじさんに、ププは雪と風が吹き荒ぶ暗闇の向こう、ムーおじさんが住む洞穴がある場所からやや上、ちょうどププとぺぺの家がある辺りを指さします。ごうごうと雪が荒れ狂っていて、視界がとても悪く、風が冷たさを直接体に染み渡らせるような感覚の中、それでもププは小さな違和感を見逃すことなくムーおじさんに伝えました。
　ムーおじさんは手の平を額に当て、目を凝らし、ププが指さした方向を見ました。つられて、ぺぺも同じように目を凝らします。ププが指さした方向には、確かに、白い雪と濃い闇に混じって、気を付けて見なければ見逃してしまうような淡い色の、影のようなものがありました。
「……本当だ。ププが言った通り、誰かいる。誰かがいるよ、ムーおじさん！」
　ぺぺが高い声を上げると、それに呼応したかのように淡い色の影は、ゆっくりとこっちの方へと近付いて来ました。
　その影は、少しずつ濃淡をはっきりさせながら、ずるずると、地面に降り積もった重たい雪を引きずるようにこちらへ下って来ます。近付くにしたがって、吹雪の中、ゆっくりと動く影は２つあるのだと言うことが徐々にわかってきました。
　ププが片方の影がポポに間違いないとわかったのは、ぺぺが涙声を上げながら、ムーおじさんにしがみついた時でした。

「ポポ！　ポポだよね？　良かった。無事だったのね！」
「あぁ。そのようだな」
ペペがほっと胸を撫で下ろし、ムーおじさんも少しほっとした様子で小さく溜め息をつき、ペペの頭を優しく撫でていました。
やがて、体中に凍りついた雪がびっしりとくっついたポポが3人の前に辿り着くと、
「やぁ、ごめんププとペペ。すっかり遅くなっちゃって」
と、昼間と同じようなのんびりとした口調で、こともなげに言いました。
「家にいるかなと思って、中を覗いてみたら、ププもペペもいないからビックリしちゃって。ムーおじさんの所かなと思ったら、案の定こっちだったね。やれやれ」
ふぅ、と長々と息を吐き出しながら、ポポは少々疲れた様子で頭に被った毛皮のフードの紐を緩めました。そして、フードを外し、カチカチに固まった雪の塊を払い落としながら、うんと軽くのんびりと伸びをしていましたが、
「……あれ？」
と、穏やかな自分とは違う3人の奇妙な様子にようやく気付きました。
「ところで、どうしたの？　こんな吹雪が凄くて寒い中、みんなで外に出て……」
「もう、ポポの馬鹿ぁ！」
いつもと何ら変わらないポポの様子に安心したのか、ペペがとうとう我慢しきれずに、潤んだ赤い瞳でポポを睨みつけました。
「やれやれ、じゃないんだから！　みんないっぱいいっぱい心配したんだから。ププはともかく、私もムーおじさんもたくさんたくさん心配したんだよ！　こんな吹雪になるまで狩りに行って、遅くなって、帰ってくるのこんな時間になって。何かがあったかと思ったじゃないの！　もう馬鹿ばか、ポポの馬鹿っ！」
今まで抑えていた感情を、まるで全部出しきってしまうかのよう

に、ぺぺは暴風に負けない、暴風のような甲高い叫び声をポポに浴びせました。
「え？　あ、ご、ごめん。ごめんよ、ぺぺ」
さすがののんびり屋のポポも、そのぺぺの暴風によってこの事態をやっと察したのか、彼女のあまりの恐ろしい剣幕に、目を泳がせながら、珍しくおろおろしてしまいました。
そのやり取りを横で見ていたムーおじさんは、まぁまぁと怒り狂うぺぺをなだめながら、
「無事にポポが帰ってきたんだから、良しとしようじゃないか。わしやププも、この吹雪の中、危険を晒(さら)す必要性もなくなったわけだしな。
とりあえず、一旦また、洞穴の中に戻るとしよう。ポポに怒るのも、何があったのか話すのも、それからだな」
と、ぺぺとポポに言いました。
その言葉に、ポポは何かを思い出したようにはっとして、
「そうだ、ムーおじさん。こいつも、洞穴の中に入れてもらってもいいかな？」
と言いながら、ポポは後ろにいる、一緒に付いてきたもう1つの影の方を向きました。
「元はと言えば、こいつのせいで、ここに戻ってくるのがこんなに遅くなっちゃったんだ。でも、ここに戻ってこれたのも、こいつのお陰なんだけど……。さぁ、こっちに来るんだ」
ポポが合図をすると、影はよたよたと今にも倒れそうな足取りで、こちらにゆっくりと近付いてきました。その近付いてきた影に、3人は目を奪われました。それは人間ではなく、足に傷を負ったまだ小さな子供のカリブーでした。
しかし、そのカリブーに目を見開く程、一番驚いた顔を見せたのは、ププでした。
そう。それは、紛れもなく、昼間ププが矢を狙い定めていたカリブーだったのです。

第5話　明日につながる今日

「よし。これで大丈夫だ」

ムーおじさんは、小慣れた手付きで、汚れ1つない清潔な包帯を子供カリブーの足にぎゅっと巻き付き終えて、すっと立ち上がりました。

そこはムーおじさんの住む洞穴でした。ポポと怪我をした子供カリブーを連れて、ププとペペ、そしてムーおじさんは、暖かな洞穴の奥へと再び戻ってきたのでした。

焚き火が温もりを与えるその部屋は、外の吹雪の轟音や、身も凍るような冷気から完全に隔絶され、1つの世界を作り出しているようでした。ポポたちが帰ってきたことで心配事がなくなり、ほっと一息をついたことで、寒くて厳しい雪国におけるこの温もりと静けさは、この上ない最高の贅沢のようでもありました。

薄暗い洞穴の壁にゆらゆらと影を落としながら、ムーおじさんは手当用の道具を元あった場所にしまい始めました。

「しかし……、ポポも運がいいな」道具をかちゃかちゃと置きながら、ムーおじさんは言います。「この吹雪で危険を察知したポポが、雪で即席のイグルーを作ろうとしていたら、この怪我をしたカリブーが突然歩き出したのだろう？　やむなくついて行ったら、この場所まで誘導された、と。

長い間、この地で狩りをしているが、カリブーが吹雪の中、人が住んでいる集落まで人間を誘導するような行動を取るなんてこと、今まで聞いたことも、体験したこともないぞ。加えて、こんな子供のカリブーが……。こんな事って果たしてあり得るのか？」

ムーおじさんは道具をしまい終え、どしりと床の上にあぐらを組んで座りました。腕も組み、眉間に皺(しわ)を寄せて、首を傾げます。その顔はとても面白いようで恐ろしく、ポポはぷっと吹き出しそうになりました。

「ボクにもわからないよ」ポポがアザラシの生肉をがつがつと食べながら、答えました。「この子供カリブーは、ププとぺぺが追っていたカリブーの群れからはぐれたみたいなんだ。なんだか怪我をしていて、それで群れからはぐれたみたいだけど……」
「……けど、なんだ？」
ポポが眉を曇らせ、言葉を濁していると、不審に思ったムーおじさんがポポに尋ねました。
「……。いや、なんでもないかな」
ポポは小さく頭を振り、そのムーおじさんの質問に答える様子もなく、ププとぺぺの方をちらりと見て、再びアザラシの生肉を食べ始めました。
ププとぺぺも、ムーおじさんにアザラシの生肉をご馳走になっていました。ぺぺはにこにこしながら美味しくそれを食べていましたが、ププは子供カリブーの方をじっと視線を送り、なんだかうつ向き加減で顔を曇らせていました。
子供カリブーは怯えている様子もなく、また騒ぎも抵抗もせずに、そこに大人しくただただ体を横たえているだけでした。その目はしきりに何かを探しているようにくるくる動いていて、まるで産まれたての赤ん坊のような、無邪気な仕草をしていました。
ププはそんな子供カリブーを、食事をするのも忘れて、ただただぼおっとしながら見つめていました。
「ププ、どうしたの？　ご飯食べないの？　ププは私と一緒で昼間から何も食べてないじゃない。ちゃんと食べないと、元気な男の子になれないよ」
なんだか元気のないププを気にしたのか、食事の手を止めて、ぺぺはププの曇った顔を覗き込みながら尋ねました。
「え？……あ、うん。ごめん、ぺぺ。何か言った？」
不意に話しかけられたププは、水をかけたかのようにびくりとして、少し慌ててしまいました。しきりに何かを考えていたので、ぺぺの話はププの耳を通り抜けていたのでした。

「もう！　ちゃんと聞いてよ。そんな風にいつもぼおっとしてるから、いつまで経ってもお子ちゃまのままなんだよ。ふんだ」
ペペはぷりぷりと、子猫のように不機嫌になりながら口を尖らせてました。そのププとペペのやり取りを見て、気にかけたポポも食事の手を止め、話しかけます。
「どうしたんだ？　ププ。さっきから一言も喋らないで、ぼおっと黙ってるけど。何かあったのか？」
ぱちん。
と、ポポの問いかけに答えるように、乾いた枯れ木が、耳を切るような鋭く弾ける音を立てました。いつの間にか暖炉の前に移動したムーおじさんが、小さくなりかけた焚火に、新しく薪をくべ始めていました。気が付けば、部屋の中に肌寒い空気が漂っていて、ひんやりと体を撫でていきます。
ププはぶるりと震えながら、重たく凍りついたような口をゆっくりと開きました。
「あのさ……。この子供のカリブー、もしかすると、僕のせいで群れからはぐれたのかな、と思っちゃって」
ププは子供カリブーの方を再びちらりと見て、うつ向きながら、かすれた声で話しました。
「ポポが、僕とププと別れた後、カリブーの足跡を追っていったら、雪原の真ん中に怪我をしたその子がよろよろと歩いていたんでしょ？」
「……うん。まぁ、それは間違ってはいないけど」ポポが耳の後ろをかきながら頷きます。「でもどうしてそれが、ププのせいだっていうことにつながるんだ？」
と、ポポが不思議そうな顔で尋ねました。
ププは昼間のことを頭に思い浮かべながら、続けます。
「僕とペペが最初に群れを見つけた時に、弓を引いていたら気付いたんだ。群れの中に、他のカリブーとは違う変な動きをしていたカリブーがいたんだ。よ～く見たら足に怪我をしてるみたいだったん

だよ。
……でも、僕が弓を外してしまって、カリブーの群れを驚かせちゃったから、その子は群れとはぐれちゃったんだよ。怪我をしてるのに、無理矢理走らせてしまったから……」
ププは言葉を切り、黙ったまま子供カリブーをじっと見つめました。目尻には何やら小粒の涙を溜めている様子です。
皆がププの話を真面目に聞いていたので、ププの言葉が途切れると一瞬の沈黙が訪れました。
「まぁ、それは確かに正しいよねぇ」
と、その沈黙に耐えかねたペペが、小さな針でつつくように意地悪くププに言葉をぶつけます。
「ペペ」
すかさずポポが、ペペを一瞥(いちべつ)し、語尾を強めて制してきたので、ふんだと言って再び口を尖らせてしまいました。
そんなペペを気にすることもなく、ププは再び重たく固くなった口を開き、話を続けます。
「僕たちが弓矢や罠を使って狩りをするっていうことは、正しいことなのかなぁ……？　いくら自分たちが生きるためとは言っても、罪のない動物たちの生活を突然邪魔して、突然(あや)殺めて、時には、この子のように、無理に群れから離してしまったりとかして。
僕たち人間が築き上げた生活なのに、その生活を保つために動物たちを、自然たちを侵害する権利はあるのかなって、狩りをしていると思い始めてきたんだ。そう考えてると……、狩りの間、弓と矢を握る手が、震えてきちゃって……」
そこまで言葉をつむぐと、ププは鼻をすすり始め、思わず鼻をこすってしまいました。目の奥に溜め込んだ涙を、かろうじて自分の細い糸のような意思でつなぎ止めているのでした。
さすがのペペも、思った以上にププが真面目に話をしているのを見て、少し驚いていました。ポポはと言うと、ププの考えに共感しつつも、ププに対してどのような言葉を投げかけて良いのか、途方

に暮れてしまっているのでした。
　そんな中、ムーおじさんだけは、洞窟いっぱいに響くような高らかな大声で笑い出し、
「はっはっはっ。ププもそういうことを考える年になってきたか！
　いよいよ少しずつ大人へと成長してきたってわけだな。はっはっはっ」
　と言いながら、豪快にアザラシの生肉にかぶりつきました。
「でもムーおじさん。ププは――」
「うむ。わかってるぞ、ポポ」放り込むように口に入れた肉をすぐに飲み込んで、すぐさま真面目な顔になってムーおじさんは言います。「ではププよ。お前に１つ質問をしよう」
「……え？」
　唐突なムーおじさんの言葉に、涙目のププは思わずきょとんとした顔になってしまいました。
「例えば狼たちがカリブーの狩りをして、殺めて、食べてしまう、というのはいけないことか？」
　これまた唐突な質問に、ププは少しの間、頭の中の回路がうまく繋がりませんでした。ようやく質問の意味を理解して、小さな声で言います。
「それは……、仕方のないことだと思う。だって狼たちはそうしないと生きていけないし、それが自然界で決まった１つのルールだから……」
「そうだ。その通りなんだ」ププのたどたどしい答えに、ムーおじさんはにやりと微笑みます。「それは人間も同じだ、ププ。生きるための理由なんてものは簡単だ。自分たちが生きるためには、そうすることしか出来ない。裏を返せば、それしか選択肢がないからだ。わかるか？」
　ププはこくりと頷きます。
「確かに動物たちには罪はない。でも、同じく自然の中に生を受けた人間だって、ただ生きることに罪はないのだ」

罪のある者とない者の違い――その違いというものは、確かにズレが生じていて、相反するものであるということ、そのことはププは既にわかっているつもりでした。でも、わかっているつもりでも、ププにとって、生き物の命の有無が自分たちの裁量によって簡単に分けられているという事実は、罪の意識を大きくさせ、心の隅に勇気を追いやり、渦を巻いた戸惑いに変えてしまいます。

しかし、そもそも人間が生きることには、本当は理由がなくて、

「生きるしか選択肢がなかったから」

と、ムーおじさんは言います。

「生き続けることを拒むことこそが、人間の最大の罪だと思わないか？　ププ」

「……」

ププはただ黙って、ムーおじさんの言葉の１つ１つを受け止め、必死に自分の考えの中にプラスさせようとしていました。ペペとポポも、ムーおじさんの話にしっかりと耳を傾け、真面目な顔をして話を聞いています。

「しかし、ププがそんな考えを持つというのも、全然悪くないことだぞ。ププだけではなく、ペペもポポもそうだし、わしだってそうだ」ムーおじさんは、ペペとポポの顔を見渡します。「人間が成長していくにしたがって、誰もが自分が生きるために何かを奪ったり、壊したり、殺めることは、とても怖くて、恐ろしい、と思うものだ。

矢をひく腕が震えて、狩りが怖くて怖くて、たまらない。そんな今まで通ったことなかった経験や不安と不満。そんな暗がりの道の中を必死にもがいて、あがいて、歩いて、自分なりに答えを見つけ出しながら成長していくんだ。

……要するに、ププは今、１人の大人としての転換期、別れ道に来ているわけだ」

――別れ道。

そのムーおじさんの言葉の中に秘められた意味は、ププはもちろん、ペペやポポにも十分に理解出来ました。ムーおじさんの話を聞

いて、自分の理解する心と、自分が理解しようとする心が追いついて、ひしめき合って、新しい答えを生み出そうしているのでした。
「……なんとなく。なんとなくわかるよ、ムーおじさん」
ププは首を傾げつつも、ゆっくり、ゆっくりと頷き、ムーおじさんの言ったことを、じわじわと自分の今まで考えていた思いの中に浸透させようとしていました。
「……ま、今はそんなに深く考える必要はない。そのうち自然とわかってくるからな。
大切なのは、？そういう心を捨ててはいけない？ということだ。ププに関しては、わしが心配することもないだろうがな！」
そう言って、ムーおじさんは再び、がははと笑い声を上げました。
部屋の中は、先程ムーおじさんが薪を加えたお陰で、じんと体の芯の中から温まるようになってきていました。燃え盛るような炎が、部屋と、ププたちみんなに勇気と決意を分け与えてくれるようです。
ムーおじさんの笑い声で、ププは少しだけほっとして、これからの自分がどう動いて、どう感じてゆけば良いのか、その先がちょっとだけ見えたような気がしました。
「よし！　こういう日は飲むに限るな！　ププ。隣の貯蔵庫の洞穴から、ウイスキーとキビヤックを持ってきてくれるか？」
途端に、ププは苦い薬を噛み締めたような顔になり、
「えー！　キビヤックも？　あれ、酷く臭うからあんまり持ってきたくないよー」
と、抗議の声を上げました。
キビヤックとは、小さな海鳥などをたくさんアザラシの胃の中に詰め込み、土に埋めて、長い時間をかけて発酵させたものです。発酵した内蔵をすすったり、熟成した肉など食べて味わう、言わば漬物のようなものです。臭いが強いため、ププはとても苦手だったのです。
「え、そう？　結構あれ、美味しいじゃないの」
反対にペペは嬉しそうな顔をしています。ペペはキビヤックが大

好きなのです。
「まぁまぁ。後でププにもウイスキーを飲ませてやるから」
ムーおじさんはからかうように、にやにやしながら言いました。
ムーおじさんにウイスキーを勧められたものの、案の定、ププはウイスキーを飲んだ後、すぐにフラフラになってしまい、いつものようにぺぺに文句を言われながらも、よろよろと家に帰っていく羽目になるのでした。

いつの間にか吹雪もやみ、雲が晴れた紺色の空の真ん中には、大きな大きな丸い月が1つ、雪の大地に住む人たちを見守るように微笑んでいました。
――今日は特別な夜。
ププもぺぺもポポも、まだその時はまだ気付いてはいませんでした。
その特別な夜である今日の月も、やがて明日の太陽に空を譲り、変わらない日常へと姿を変えていくのでした。

第6話　その先にあるもの

よく晴れた日の昼下がり、風は優しく透き通り、大地が緩やかにその身を横たえています。

眩しい太陽が織りなす無数の光の木地が、様々な角度から真っ白な雪を照らし、虹色に輝く不思議な空間を作り出していました。

冬の大地は、今はもう、長い長い冬の季節の４分の３を過ぎようとしていました。もうすぐこの大地に短い春が訪れます。

そんな久々の穏やかな日に、ププは、半年前に怪我をしてやってきた子供カリブーの新しい住みかを作っていました。使わなくなった森の木々をのこぎりでぎこぎこと切り、切った部材を計画的に組み立てていました。

カリブーの子供は、ププやぺぺ、ポポの力を借りてすくすくと成長していき、半年前と比べて体が一回り程大きくなっていました。そのため、ムーおじさんが前に作り上げた住みかは小さくなってしまい、今のカリブーの子供にとっては窮屈な居場所となっているのでした。

「ふぅ……」

ププはのこぎりを動かす手を一旦休めて、額ににじんだ汗を払いながら、一息つきました。

それと同時に、カリブーの子供がププの側へと元気に近付いてきました。あの時の怪我は既に完治し、後遺症も残らず、元気に生きているのでした。

「やぁ、ピピ。もうすぐ君の新しい家が完成するから、もう少し待っててね」

ププはにこりと笑いながら、ピピと名のついた子供カリブーの頭を優しく撫でてあげました。

子供カリブーのピピと言う名は、ぺぺが付けたものでした。酷い怪我をしていたため、そのままでは自然に返してもすぐに死んでし

まうだろうとポポが判断したのでした。ムーおじさんの粋な計らいにより、みんなで交代で世話をしようということになり、そこで、ペペが名前がないのは不便じゃないか、可愛い名前を付けてあげよう、という提案により、ピピという名前が付けられたのでした。

ピピは、体が大きくなったとは言えど、まだまだ小さな鼻をププの頬へとすり寄せてきました。ひんやりとした冷たさが、熱ったププの頬には心地よいものでした。

ププはそんなピピを微笑ましい様子で、見つめていました。

「怪我をしたカリブーは、群れに嫌われてしまうんだ。足を怪我をしたなら尚更だ。何故なら、足を怪我をしたカリブーは、うまく雪を掘ることが出来なくなり、餌も十分に取れなくなってしまう。そうなると、やがて、体力が徐々に徐々に弱っていってしまうんだ。また、熊や狼たちの格好の餌食になってしまうし、酷い時には足が化膿して、感染症にかかってしまうこともあるんだよね。そうなったら、ついには群れ全体を滅ぼすことにもなってしまう。

カリブーたちは、そうなる前に、怪我をしたカリブーに見切りをつける。本能的に群れを守るためにね」

見つめながら、ププは半年前のポポの言った言葉を思い出していました。

無邪気な顔をした子供カリブーのピピは、ププの思惑を知る由もなく、まだ世界をあまり知らない汚れのない瞳をそこに湛えているのでした。

「ピピ。君は、僕らの下で生活していくことが、幸せだったのかな……？　それとも……」

ふと、そんな小さな言葉を洩らしました。

「おーい、ププー！　どこにいるんだー？」

と、そこへ焦りをにじませたような、ポポの低いトーンの声が聞こえてきました。

静かな雪の大地の中では、その声はじんと振動するようにこだましながら、更に透き通った音を響かせてきます。それはまるで、白

い雪が綺麗にフィルターをかけているかのように、言葉を研ぎ澄ませているみたいでした。そのため、焦燥や緊張などのトーンまでも大きくさせてしまい、尋常ではないような様子を広げてしまうのでした。

ププはその声にはっと我に返り驚きながらも、すぐに声のする方向へと体を向け、大きく手を振りながら応えます。

「あ、ププ。やっぱりここにいたんだな！」

ププの応答に気が付いたポポが、すぐにププの元へとやって来ました。

「う、うん。ピピの新しい住みかを作ってやろうと思ってさ」ププはピピの頭を優しく撫でながら答えました。「もう少しで出来上がるところで、今ちょっと休憩していたんだ」

「そっか」

ポポは、ププが作り上げたものと子供カリブーを見比べました。新しい住みかは成長した子供カリブーにとって丁度良く、なかなか美しく出来た作品であったので、思わずポポは惚れ惚れしてしまい、緩んだ顔になってしまいました。しかし、ププの元へとやって来た理由を思い出し、すぐにまた真面目な顔になりました。

「あのさ、ムーおじさんが呼んでいるんだ。なんでも、ボクらに頼みたいことがあるって言ってた。弓矢と防寒用のコートの準備を万端にしてから、イグルーの方に来てくれ、だってさ。とりあえず、ちょっと火急の用事らしくて、悪いんだけど、すぐに行ってくれるかな？　ボクもすぐに行くからさ」

ププは眉をひそめます。

「え。弓矢と、コート……？　一体なんだろう？」

ポポやペペも含めてププは狩りに行く時以外は、弓矢とコートの装備をすることがありませんでした。また、ププやペペがムーおじさんのことを頼ることは多々あれど、ムーおじさんが自らププたちを呼ぶということは、初めてのことでした。極力、自分たちの考えで行動し、生活してゆく、それがこの雪の中で住むププたちの無言

の掟だったのです。
　そのため、ムーおじさんからの火急の用事であるというポポの言葉は、重くププの気持ちにのしかかり、戸惑いと不安に変えてしまいました。
「とにかく、詳しいことはムーおじさんに聞いてみてくれないか？
　とりあえず、ボクは一旦家に戻るから」
「わ、わかった。僕もすぐに行くよ」
　言葉に戸惑いと不安の色をぼかしながら、ププは急いだ様子のポポの背中に声を落としました。きちんとポポの耳に届いたかどうかは疑問でしたが、ププはすぐに住みかを作るのに使っていた工具や、余った木材やらを片付けて、自分の家へと戻るのでありました。
「ぺぺー。いるかいー？」
　ププはぺぺの家の扉の前に立ち、右の手の平を口元に添えて大きな声で呼び掛けました。
　ププは既に防寒用のコートにマフラー、フードを身に付け、背中には弓矢も装備していました。ポポと合流した後、すぐにムーおじさんの元へと向かって伝言を聞き、それからププは出発する前にぺぺに挨拶をしておこうと思ったのでした。ポポは先に村の入口に行って、そこで待っていると言っていました。
　ププが呼び掛けた後、しばらく経ってもぺぺが出てくる気配がありませんでした。ププは不審に思い、扉をノックしました。
「ぺぺ……？」
　コンコン、と木の扉を叩く小さな音は、吸い込まれるように消えてゆき、ププの不安はそれに反比例するかのように大きくなってきました。
「ぺぺ？！……あ、あれ……？」
　ププはたまらず声を上げながら扉に触れてしまいましたが、それには鍵がかかっておらず、すんなりと開いてしまったために驚きました。きぃ、と木の独特の軋む音を響かせながら、ゆっくりと扉が開いていきました。

不安になりながらもププは家の中へと足を踏み入れました。ペペの家の中は薄暗く、何時間も換気をしていないような重苦しい空気に、ププは思わず咳き込んでしまいました。それ以外に音は無く、窓から射す太陽の光の帯だけがほのかな安心感を与えてくれるだけでした。

家の中を見渡すと、ペペがベッドの中にまだいることに、ププは気付きました。ペペは滅多なことでは寝坊することはなく（最近はププも？ようやく？しなくなりましたが）、こんな時間まで寝ていることは今までありませんでした。

「ペペー……？　もうお昼だよ！」

ププはペペの眠るベッドに近付き、ペペに話しかけました。しかし、ペペはププの呼び掛けに、うぅーん、という小さな声をあげ寝返りを打つだけで、きちんと答えてくれませんでした。ペペの額に手を当てると、じんわりと熱く、汗っぽい感じです。

「……う……ん……？　ププ……？」

ププが額に手を当てると同時に、ペペがパチリと目を開けて、少し湿った睫（まつげ）をしばたたかせました。

「ペペ。だ、大丈夫？　なんだかとても額が熱いけど……」

「……うん。昨日から風邪をひいちゃったみたいで、ずっと寝てたんだ。ところで、何処かに行くの？　そんな重々しい格好をして」

「うん。ムーおじさんに狩りを頼まれて、カリブーを捕まえにいかないと駄目みたいなんだ。鹿茸（ろくじょう）の薬を作るための材料が足りないらしいんだけど、ムーおじさん、別の用事があって忙しいみたいで……」

「……ん、そうなんだ。私もお手伝いしたかったけど、ちょっと無理かな。ごめんね……」

ペペは目をふせ、滅多に口にしないような弱音を出し、ふぅと長々と息を吐きました。

いつもは気丈で元気に振る舞っているペペなのに、珍しく弱気な状態の彼女に対して、ププはかける言葉が見つからないでいました。

もどかしいような、うんざりするような自分の気持ちに、ププは奥歯を噛み締めながら、
「と、とにかく行ってくるね。ペペ、早く治るといいね！」
と、精一杯の明るい声でペペに行ってきますの挨拶をすることしか出来ませんでした。
「……うん」
消え去りそうな言葉を飲み込むように口に出しながら、ペペは出発するププを見送りました。
ペペへの心配を胸の奥にしまいながらも、ププは村の入口で待っていたポポと合流しました。
ペペが熱があることをポポに伝えると、
「そうか。やっぱりペペのためにも一刻も早く、鹿茸の薬を手に入れないと」
と、強い言葉を吐き出しました。ププもそれに大いに賛成でした。
今日の天気は、太陽と空の仲が良好らしく、今もまだ快晴が続いていました。遠くの鋭い山脈たちは、白い雪と青い空のキャンバスに綺麗に描かれているようで、はっきりと強く佇んでいます。
２人は太陽の光に照らされた眩しい白雪道を、小さな足跡を残しながら、太陽が向かう南へと進んでいました。２人が足跡を付けてゆくそのすぐ横には、カリブーの蹄の跡が、幼い子供が散らかしたように無数に点在しています。ざっと見渡すと、それはなかなか中規模のカリブーの群れらしく、２人はその群れに狙いを定めて、蹄の跡を辿っているのでした。ププは左側、ポポは右側の蹄の跡を観察しながら歩いていました。
「カリブーたちは、よほど餌に困っているんだな。ここ数日の移動量が半端ないや。もうすぐ春だって言うのに、一体どうしたんだろう？」
ポポがその蹄の跡を歩きながら見つめて、何気なく呟きました。ププにもそれはわかっていました。確かに、カリブーたちの蹄の跡は、人間で言う焦りや不安を象徴したかのような形で残っていまし

た。どうしてカリブーたちは最近こんなにもせわしないのだろうかという疑問が、ねっとりとした黒く重たい気持ちとなって、ププの頭の中に貼り付いていました。

しかし、それでもププは不安にも似た気持ちの影を頭の隅っこに押し退け、カリブーたちの無数の蹄の跡を注意深く観察しながら歩を進めていました。

太陽がやや西に落ち始めた頃、それと同時にカリブーたちの蹄の跡も西に進路を変え、ププとポポもそれにならい、西へと向かい始めました。今まで平らだった雪道は、西へと進路を変えるとすぐに、軽い傾斜を伴った小高い丘のような道になりました。しかも、積雪も段々と深くなってゆき、一歩一歩ごとが突然、足のつま先に重りをはめたような感覚になり、ププは勿論、ポポも多少息を切らしていました。

「結構きつい傾斜だな。ププ、足元を滑らせないように気をつけるんだぞ」

「うん。わかってるよ、ポポ。……ん？」

そこでふと、ププはちょっとした違和感を覚えました。目の前にあるのは、一見すると、軽い傾斜に積もった雪に付いているなんのへんてつもない、ただのカリブーの蹄の跡でした。しかし、ププは真っ白なジグソーパズルの中に、ミルク色の1ピースが混じっているような、そんなちょっとした感覚を持ったのでした。

「……ポポ。ここにある足跡の中に、カリブーたちの群れの足跡とは違うものも混じっているような気がするんだけど、気のせいかな？」

「え？　ちょっといいかい、ププ」

ププの言葉を聞いたポポは、すぐに彼の方へと近寄り、隣にしゃがみ込みます。そして、ププが指摘した場所をまじまじと観察し始めました。

ややあって、

「……これは。確かに、カリブーたちのそれとは少しだけ違うみた

いだけど……。よく見つけられたなぁ、ププ！」
と、ポポは少々驚いた様子で、声を上げながらププと顔を見合わせました。
「ぐ、偶然だよ。たまたま運が良かったんだよ」ププは少し照れながら小さな鼻をかきます。「なんの足跡かわかるかい？」
「うーん……」
ポポは頭をかきながら、じっくりその足跡を観察をして、自分の中の記憶や経験を頼りに、その足跡の正体を頭の中で追跡します。
ププと比べて、ポポは長い狩りの経験があるものの、はっきり言ってしまうと、カリブー以外の足跡をすぐに特定するのは難しい事なのでした。しかし、それをまだ経験の浅いププが、偶然とは言っても、この白い積雪の上でカリブーの蹄の跡と違う足跡を見つけた事自体が、ある意味凄い事なのでした。洞察力と観察力だけで言えば、ププのただならぬその素質は、もしかするとポポや、はたまたムーおじさんすらも凌ぐのかも知れません。
「……狼……、かな？　自信はないから１００％とは言い切れないけど、多分この足跡は狼の足跡だと思う」
「狼？」ポポの言葉を聞いたププは、狭い眉間に皺を寄せます。「その割にはなんか違和感があるけど……」
「そうなんだ。ププもやっぱり気付いてたね。……確かに、この狼はカリブーの群れを追って付いた足跡だとは思う。けど、それにしては足跡の付き方が不自然と言うか、動きが散漫と言うか。しかも、カリブーの群れを狩りするのなら、普通は狼も同じように群れで狩りをするはずなのに、この足跡を見ると、その形跡は全然ないんだ。これじゃあまるで――」
「ポ、ポポ！　あれを見て！」
ポポの言葉を途中で遮り、雪の丘の向こうに何かを発見したププは、少し震えた指を差しながら、雪に響くような驚いた声を上げました。
その雪に反射した声にすぐ反応したポポも顔を上げ、ププの指差

す方向を見ました。
「あれは……！」
すぐ向かうの雪の上に、黒いような、灰色のような何かが横たわっていました。２人はすぐさま、駆け足でその場所に移動します。
２人が近寄ってみると、それはもうぴくりとも動くことはない、ある動物の絶命した姿でした。絶命する前には、きっと酷く苦悶したであろうその口元から、乾いてざらざらになった大きな舌を出しながら横たわっていました。
その酷い様子に、ププとポポは思わず顔をそむける事が出来ないまま、小さな唸り声を溢し、目を見開きながら立ち尽くしました。
真っ白な雪の上に、無数の針の先を突き刺したような赤い血痕を残し、雪のように冷たく横たわっている黒色とも灰色ともつかない毛皮を持ったその動物は……。

「狼が……、死んでる？！」

２人の声をかき消すような一陣の風がびょおと吹き、細かく乱暴に砕いた氷のような雪粒が、ププとポポの火照った顔を何度も撫で付けました。鋭い棘がついた布で顔を拭かれたような感覚に、ププは目を細めます。
ポポはその雪粒から腕で顔を守りながら、背負っていたリュックを雪の上に下ろし、片膝をつけ、リュックの中をガサゴソとまさぐり始めました。ポポはリュックの中から少々くたびれた色の麻の布切れを取り出し、悲しみと悔やむ気持ちを混ぜ合わせた薄青ざめたような顔色をしながら、狼の亡骸にそっと被せてあげました。そして、その四隅を風で飛ばないようにしっかりと固定しました。
「でも、どうして、狼が……？」そのポポの行動を見つめながら、ププが不安と共に呟きます。「カリブーたちが餌を食べられないの

と同じように、狼たちも餌が不足していて、上手く狩りが出来なくなっちゃって餓死しちゃったのかなぁ……？」
「……」
ポポはププの疑問に答えず、険しい顔をしながら、カリブーたちの蹄の跡が続く西の丘の向こうを見つめました。そして、雪の上に下ろしていたリュックを再び背負い直し、力強く立ち上がりながら、ププの顔をきっと見つめます。
「ププ。ボクの事は信頼しているよね？」
「え？　そ、そりゃあもちろん。狩りの腕や知識も僕なんかより上だし、ムーおじさんと同じくらい信頼してるけど……」
どうしたの？　という言葉を喉の奥に飲み込み、ポポからの唐突な質問にププはしどろもどろになりながらも答えます。そのププの答えに、ポポは唇の端っこを何かで摘まんだようにニヤリと上げ、微笑みました。
「ふふ。ボクもププの事は誰よりも信頼してるよ。……だからこそだ。ここからはボクの言う事をただ黙って聞いてほしい。約束してくれるかい？」
「わ、わかった」
ププはポポのいつになく真剣な眼差しに、こくりと頷きます。
「ありがとう。ププ、ここからは二手に別れよう。ボクはこのままカリブーたちの蹄の跡を追って西の方角へ向かう。ププはこの丘を登らずに、この丘に沿って南の方角に向かってほしい。恐らく、ボクの勘が正しければ、ここにあるのと同じようなカリブーの蹄の跡が見つかるはずなんだ。その跡のカリブーの群れを追って、カリブーの狩りしてほしいんだ。いいかい？」
「わかった」
いろいろとポポに尋ねたいことはありましたが、一度黙って言う事を聞くと約束した以上、ププは素直に力強く返事をします。
「よし。暗くなる前に、ここで落ち合おう。いいかい。くれぐれも無茶をしたり、早まった真似だけはしないでほしい。天候が変わり

始めた時も、すぐにこの場所を目指すように心掛けるんだよ。ボクも無茶はしないつもりだけど、もし暗くなるまでにここに戻らない事があったら、絶対にこの場所で、簡易イグルーを作って、一泊だけ待っててほしい。それでも戻らない場合は、一旦村に戻ってムーおじさんに報告してほしい。……いいね？」
「うん。約束するよ、ポポ」
「よし。じゃあボクはもう行くよ」
ププとポポは頷き合うと、すぐさまポポはくるりと背を向け、雪が降り積もった丘をぐんぐんと風が滑るように上って行き、やがてすぐに見えなくなりました。
後に残ったのは、ただ黙って立ち尽くしている1人の小さな少年と、布に包まれたもう動く事は永遠にない可哀想な狼と、丘の上から吹き抜ける白い雪を伴った風だけでした。
ププはもう見えなくなったポポの後ろ姿を名残惜しそうにしばらく見送りながら、ようやく今来た道を戻ろうと思い立ち、くるりと雪で凍ってしまったような重たい体を回そうとしました。
その途端――、

どん。

と、ププの胸に何かがぶつかりました。
「うわっ！」
ププが何かにぶつかるのと、叫び声の塊を喉の奥から吐き出すのは、ほぼ同時でした。不意に何かにぶつかって驚いてしまった余り、ププはその拍子に、どすんと雪の上に尻餅をついてしまいました。勢いよく雪の中に座り込んだためか、ププの周りにキラキラした雪の細かな欠片がぶわっと立ち込めます。
「つ、冷たっ――、え？　ぴ、ピピ……？！　どうして君が此処に！」
勢いよく宙に舞った雪の粒がププの頬や首を撫で、冷たさの余り、

ぶるりと体を震わせながらも、ププは目の前の黒い影の正体に驚きを隠せませんでした。なんと、彼の目の前にいたのは、村に置いてきたはずのあの子供カリブーのピピだったのです。

ピピはププのその驚きを知る由もなく、少しだけ温かく、少しだけ湿った鼻の先を、ププの頬に静かに母親に甘える小鹿のように擦りつけてきました。それは、体の芯まで凍えるような気温に、長時間さらされて強ばった肌には心地よくて温かく、癒されるものでした。

「う、くすぐったいなぁ！　でも、気持ちいいや……。全く、此処まで着いてくるなんて、やんちゃなカリブーだな、君は！　でも、どうやってこの場所が……？」

ププの疑問を他所（よそ）に、子供カリブーのピピは、ププの顔に小さな鼻を擦り続けていました。ピピの後ろをひょいと顔を出して見ると、ピピの蹄の跡らしきものが、雪の上に点々と迷う事なく真っ直ぐ、こちらに続いていました。それはまるで、迷子になった子供が母親を見つけて、安心したように駆け寄って来る行動にも似たものでした。

ププはピピの不可解な行動に、うーん、と不思議な顔をしたものの、雪を疑問と一緒に振り払いながら、すっと勢いよく立ち上がります。

「まぁ、来ちゃったものはしょうがないよね。君もこの厳しい雪の大地に暮らす民の一員と言っても過言ではないし、僕と一緒に行動はできるよね。ここから1人で……、いや1匹で帰れって話したところで、通じるワケがないしね。狼たちも近くにいるみたいだし――」

ププがちらりと側の布切れを見ながら、小さく呟きました。ピピはそれを理解したかのように、小さな鼻から、ふんとばかりに息を吹き出しました。ププはそれが少しだけ可笑しくて、ぷっと笑いました。

「でも、ポポには強がったものの、ホントはちょっとだけ心細かっ

たんだ。だから、ちょうど君が来てくれてホッとしたよ。これからカリブー狩りをするって時に、カリブーである君が一緒にいるっていうのも、少しだけ嫌な気分だけど……」ププは一瞬顔を曇らせますが、うんと頷きます。「僕はペペやみんなの為に、鹿茸の薬を必ず手に入れなきゃいけないんだ。そこは我慢しておくれよ？」

了解したぞ、と言わんばかりに、ピピは欠伸（あくび）にも似たような感じで口を広げました。きゅう、と空気を擦り潰すような可愛らしい音が、ピピの喉の奥から洩れます。

「よし。じゃあ、行こうか！」

ププとピピは今までやって来た道を戻り、一路、再び南へと針路を変えるのでした。

1人と1匹の足跡は、降り積もった雪の上にしばらく残っていましたが、ポポが向かった先の丘の上から吹き付ける強い冷たい風によって、すぐにかき消されてしまうのでした。後に残ったのは、バサバサと強い風から逃げるようにはためく、ポポの残した麻の布切れだけでした……。

第7話　少年と子供カリブー

右手にやや傾斜のついた丘を見据え、太陽をほんのちょっと、本当に少しだけ右手に見上げながら、ププとピピはひたすら南へと向かっていました。南に向かえば向かう程に、西に見える丘は勾配がきつくなってゆき、時には崖のように切り立った場所さえもありました。

丘の上からは、凍てつく冷気を伴った粉雪が絶えることなく吹き付け、息をする感覚も奪われてしまう程に強く、ププは思わず毛皮のコートに首をすくめ、顔をしかめます。それでもププは、前へ歩く元気を失わずにへこたれる事もなく、ずんずんと足を踏みしめながら力強く歩き続けました。それは、真上にある真っ赤な太陽のお陰なのか、それとも、一緒に隣を歩いているピピのお陰なのか、どちらかはわかりませんでした。

子供カリブーのピピは、ププの後を早足で追ったり、追い越したりしながらも、まだ大人カリブーのようには成長しきっていない角を見せびらかすように、ププにぴったりとくっつきながら歩いていました。時折、小さな鼻に入る細かな雪の欠片のせいで、小さなクシャミをしています。その度にピピは、ぶるると迷惑そうに鼻と口を震わせるので、ププはあははとピンポン玉のように転がるような笑い声を、広い雪原の中にこだまさせていました。その笑い声に応じるかのように、ピピも軽やかにステップを踏みながら、踊るような感覚で歩き出すのでした。

その様子を見ながら、ププは無邪気に笑いながら言います。

「ピピ、知ってるかい？　生物でこんな風に笑ったりするのは、僕たち人間だけなんだって。でもこうして君と2人でいると、君もなんだか人間のように笑ってるように見えるね！」

そのような明るい感じで、1人と1匹はしばらく歩いているのでした。

それから小2時間程歩いたでしょうか。真っ赤な太陽が少しだけその輝きを纏(まと)うのをやめて、誰もが一目見てわかる程に西に傾いた頃、右手に見据えていた丘が、完全に切り立った崖に変わってしまいました。辺り一面が真っ白な雪に覆われてではなく、所々、茶色い鋭いような岸肌がひょっこりと頭を出しています。何気なく触れてみると、ごつごつと角ばっていて、おまけに氷のように冷たいのでした。もう徒歩では西に向かう事は出来なさそうです。

そして更には、左手に見える景色も先程とは一変し、こちらの方は険しい深い谷へと姿を変えつつあるのでした。少しでも進む方向を間違えれば、足を滑らせて転がり落ちて行きそうです。

「おっかしいなぁ……。道を間違えたのかなぁ？　ポポと別れた後に、あの丘を下りきらない内に南に向かってしまったのだろうか……」

ププが少しだけ不安になりながら小さく呟きました。戻った方がいいのだろうか、そんな不安を他所に、ピピはと言うと、左右の景色に臆する様子もなく、先程と変わらない軽やかなステップで堂々と歩き続けているのでした。

「あ、ねぇ、ピピ。もう少し慎重に歩いてよ。足を滑らせたりしたら、大変なんだからね！……ん？」

ピピが歩くその先の岩肌で、ごそごそと何かがせわしなくうごめいています。ププはそれにいち早く気付き、眉をひそめました。

せわしなくうごめいていたその生物は、真っ白な耳を高くぴんと真っ直ぐに張り、きょろきょろと辺りを伺うように首を動かしています。

「ユキウサギだ！」

ププが叫ぶやいなや、真っ白な毛に覆われたユキウサギは、耳を更にぴんと張ると同時に、あっという間に走り去り、ふわりと雪の中に飛び込むように姿を消してゆきました。文字通り、脱兎の如くです。

「こんな場所でユキウサギに会えるなんて思ってなかったなぁ。何

をしてたんだろう。……あれ？」
　ププは先程までユキウサギがいた岩肌に、何か見慣れないものが存在しているのに気付きました。ピピもそれに気付いたらしく、小さな鼻を擦り付けながら確かめているようです。
　岩肌の角度の問題でしょうか、風があまり吹き付けない場所らしく、雪があまり降り積もっていない場所がありました。そこはごつごつした岩の頭だけではなく、こげ茶色をしたふかふかした土も姿を見せていました。その土の中に存在している、冬の間には滅多にお目にかかることのない緑色のものに、ププは思わず目をキラキラと輝かせ始めました。
「これは、もしかして……。雪苺（ゆきいちご）じゃないか？！」
　土の中から、ほんの少しだけ顔を覗かせているその植物は、厳しい寒さからその身を守るように、何枚も何枚も小さな葉っぱを重ねて、寄り添うように存在していたのでした。先程のユキウサギがかじっていたのでしょうか、表面にある葉っぱが、少しだけギザギザと千切れています。
「最近じゃあ、この土地では滅多に見かけることがなかったのに、まだここら辺にも咲いていたんだ！　凄いぞ！」
　ププは興奮しながら、その雪苺の葉っぱを手に取りました。ひんやりと冷たく、表面はざらざらとしています。それから、葉っぱを慎重に丁寧に一枚ずつ剥がしてゆきました。すると、辺りにふわりと、吸い込んではするりと鼻から逃げてゆく妖精のような、もどかしくも優しい、甘い香りが漂い始めるのです。
　くんくんと鼻を寄せていたピピは、突然の嗅いだこともないような香りに、目をしばたたかせ、不思議な顔をしています。
「不思議な香りでしょ？　ピピ。雪苺の葉っぱは、乾燥させて湯に煎じると、とても甘いハーブティになるんだよ。リラックス出来るし、栄養も満点なんだ。余った葉っぱは、その後は臭い取りにも使えるんだ。そして……」
　ププは更に慎重に慎重になりながら、葉っぱをゆっくりと剥がし

続けてゆきました。すると、中から真っ赤に見えるような、桃色に見えるような、美しい色をした宝石のような実が姿を現したのです！
ププはすっかり上機嫌になり、先程まで感じていた不安な気持ちは、すっかりどこかに飛んでいってしまったようです。
「ピピ、見てよ！　これが、最近じゃあ本当に滅多にお目にかかることが出来ない、幻とも言われてる果物……。雪苺の果実だよ！」
この時、ププは雪苺を見つけた喜びの余り、自分がとても危険な場所に足を踏み入れているということすらも忘れていました。そして、それをすぐに後悔することになろうとは、ププはその時、微塵も思ってはいませんでした。
ププは取り出されたひんやりと冷たい雪苺の果実を手のひらに乗せながら、いまだ興奮冷めやらぬ声を、白い息と共に吐き出しながら言いました。
「この雪苺の実、今、熱が出ているぺぺにも食べさせてあげたいなぁ。僕は昔、ムーおじさんと一緒に、ちょっと遠くの方まで狩りに行った時に偶然見つけて食べたことがあるんだけどね。この前、ぺぺと一緒に森に薪拾いに行った時に、ぺぺにその事を話したら、食べてみたいなぁってウキウキしながら言ってたんだ。雪苺の果実、初めて食べた時は本当に美味しくて、言葉では言い表せられないくらいなんだよ。これを食べたらきっと、ぺぺの熱が出ている元気のない体だって吹き飛んじゃうよ！　あ、ピピは食べちゃ駄目だよ」
ピピが、じゃあ自分もと言わんばかりに、ひょいと口を擦り寄せて来たので、ププは思わず雪苺の果実をピピの届かないところまで遠ざけました。ピピが不平を言いたそうに、ふふんと鼻を鳴らしました。
ププは宝石にも似たそのキラキラした雪苺の果実を、再び葉っぱに丁寧に形が崩れないようにくるみながら、大事に大事に、持ってきていた袋の中にしまいました。
「ホントは、ポポや君の分もあれば良かったんだけど。もしかしたら、よく探せば近くにまだあるかも知れないな。……ん？」

辺りにまだ雪苺がないか調べ始めようとしたププは、皮肉にも、そこでようやく何かとてつもない違和感を感じることが出来たのでした。

それは音から始まりました。どこかで、ぎし、ぎしぃ、と、まるで今にも壊れそうなボロボロの小舟をオールで力いっぱい漕ぐ時のような、今にも折れそうなボロボロの木の板が張り巡された床の上を歩く時のような――そんな耳慣れない軋む音が、微かに耳にざわめくように聴こえてくるのです。

「……なんだ？」

ププは辺りをきょろきょろと見渡しますが、周りには誰も、そして、何もありませんでした。ピピも敏感に何かを感じ取り、耳をそわそわと動かしています。

ふと足元を見ると、ププとピピの周辺の降り積もった雪に、誰かが残した歯形のような亀裂が連続して入っています。それは谷の向こう側から、こちら側の岩肌の雪苺が生えている土がはだけている場所まで亀裂が入っていて、ちょうどププとピピを包む形で今まさに繋がろうとしているのでした。まるで、雪苺を摘んでしまった1人と1匹に罰を与えるかのように、切り離すかのように――。

ププは、さっと顔から血の気が引いて、青ざめてゆく様子が自分でもわかりました。

「まさか……。ここは雪が土の上に降り積もった場所なんかじゃなくて――」

ぎしぃ……！

一際、木製のベッドが大きく軋むような大きな鈍い音と共に、最後の亀裂が繋がりました。その瞬間、ぐらりと、ププの目の前の視界が大きく揺れます。

そう、そこは雪が土の上に降り積もった場所なんかではなくて、谷間の上に雪が積み重なって出来た、脆い雪の棚の上だったのでした。当然、子供とは言えど、人間とカリブーの体重を支えきれる程の力もあるはずがありません。

ププとピピの足元の雪が、重力に逆らえずに、周りの雪から離れてゆきます。
「うわあぁぁぁ――……！！」
気が付いた時には、叫び声を深い山の中にこだまさせながら、ププとピピは、深い谷間の中へと吸い込まれるように消えて行ったのでした……。

儚くも淡いオレンジ色の夕焼けに照らされた粉雪が、ゆらゆらと陽炎のように舞っています。それはまるで、舞台で飛び跳ねるように踊る子供のように軽やかで、空をひらひらと舞う蝶のようにゆったりと流れているのでした。
その中、自分の背丈に似合わない弓矢を担いだ小さな子供が、満面の笑みを浮かべて歩いていました。隣には、立派な角を生やした大人のカリブーを担いだ屈強な男の人が、同じく微笑みながら付き添っています。
１１歳になったばかりのププは、その記念に、太陽が昇るか昇らないか、それくらいの早朝からムーおじさんに連れられて、村とは少し遠い山の麓までカリブー狩りに来ていたのでした。今は、無事にカリブーを仕留めて、ほくほく気分な感じで帰路についているところなのでした。

――これは、３年前の、幼き頃のププの、忘れることのない記憶の中の出来事……。

「うわぁ……」
広大な雪原に埋めつくされんばかりの、数百頭ものカリブーの群れに、ププはただただ息を飲むだけでした。どどどど、という大地

のうねりにも似た、その群れの足音と共に駆け回るカリブーたちは、ププにとって初めて見る光景でありました。
「どうだ、ププ？　村の近くで狩りをしていたんじゃあ、ほとんど見ることの出来ない光景だろう。ここは、春になると南から北へと移住し始めるカリブーたちが、一度に集まる広大な平原なんだぞ」
ムーおじさんはププの肩に、ぽんと手のひらを乗せながら言いました。
ププは、同時に深々と溜め息をつきながら、目の前の光景に見とれていました。
「……さぁ、ププ。見とれているだけでは、カリブーは仕留めることは出来ないぞ。弓矢の準備をするんだ。ついてこい」
「うん！」
ププは背中にある弓と矢を用意しながら、カリブーの群れに一歩ずつ近付いて行くムーおじさんの後ろを追いました。ちょうど2人が身を隠すことが出来る岩影に辿り着くと、ムーおじさんはププに様々な指示を出します。
「いいか？　ププ。あれが今回、儂らが狙うカリブーだ」
ムーおじさんは、群れの端っこで地面にある何かをついばんでいる、小型のカリブーを指差します。小型とは言えど、それは立派な角を携えた立派な大人のカリブーでした。側には、生まれたてのカリブーでしょうか、ププよりもうんと小さい、カリブーとは言い難いような子供のカリブーがいます。
ププは、ムーおじさんに手伝ってもらいながら、まだ未発達な腕で、ぎこちなく弓を引き、矢を構えます。
「ププ。いいか。そのまま真っ直ぐ矢を固定しておくんだぞ。矢を射る時は、呼吸を乱してはいけない。集中力が大事だぞ」
ムーおじさんが静かに、それでも的確にププに言葉を放ちます。ププはじっとりと、手の平が汗ばんでくるのがわかりました。今にも手を離してしまいそうです。
しかし、身体は緊張しているものの、ププは初めての矢の感触も、

初めてカリブーを射るという感覚にも臆することもなく、ププの中の気持ちはただただ純粋に、１つのことしか考えていませんでした。
ププの引く矢の先が、カリブーの体を捉えた瞬間、矢がそのカリブーめがけて真っ直ぐ飛んでいくのが見えました。

これが、ププにとって、初めてのカリブー狩りだったのでした――。

――最初に戻ってきたのは、鼻の下をくすぐるような、鼻の下がちりちり痛むような、もどかしい感覚でした。振り払っても振り払っても途切れることのない細かな雨が、ぶつかってくるように、それは続けて振り注いでいるみたいでした。何かが、呼んでいるかのような声にも、それは聴こえます。
「……誰？」
ププは優しく呟きながら、思わず右手をひらりと動かしました。すると、ぼふ、という音と共に、綿のような雪がひらひらと辺りに舞い、ププの顔いっぱいをくすぐりました。
「……冷た、い……」
ププはそのひんやりとした雪の感触に、うっすらと目を開けました。その目に映ったのは、心配そうな顔をしている子供カリブーのピピでした。
「ピピ？」
これは夢か現（うつつ）か、記憶がはっきりしないププは、おぼろ気な目をくるくると回しながら、何が起こったんだろうと、口をぽかんとさせていました。ププがいる場所は、降り積もったばかりの軟らかな新雪の上であり、ププの身体は半分以上も雪の中に埋まっていたのでした。
「僕は、一体……？　そうだ。僕はあの崖の上から落ちたんだった……。それにしても、温かいなぁ。君がかばってくれたのかい？

ピピ」
　ププはピピの頭を優しく撫でてあげました。ピピはププの上に覆い被さり、寒さと雪からププを庇うように寝そべっているのでした。ピピのその毛皮のお陰で、ププはこの氷点下の気温から守られ、無事に意識を取り戻すことが出来たのです。毛皮のコートやフードをしっかりと身に付けていたことに加え、雪が溶けずに冷たい水となって、身体に染み込んでこなかったことも幸いしたようです。
「……夢を見た気がする」ピピを撫でながら、ププが独り言のように呟きます。「僕が初めてカリブー狩りをした時のことだったよ。あの頃は、狩りに行けたってことがとても嬉しくて嬉しくて。何の迷いもなく、カリブーを矢で仕留めてんだなぁって。そんな夢を、どうして今更見たんだろう……」
　赤く火照ってぼぉっとした顔を、ププは何気なく空に向けました。切り立った崖は高く、その先からは、裂けるような薄暗い空がププを見下ろしています。
　そこでププは、目を見開きながらはっとしました。そして、それが合図だったかのようにププの途切れ途切れだった曖昧な記憶が１つに繋がり、ププが現在、自分自身が置かれている現状について把握したのでした。
「ピピ！　僕は一体どのくらい気を失っていた？！」
　ププは再び空を見上げます。切り立った崖の上にある裂けるような空は、うっすらと曇っていて、今にもどんよりとした色をこぼしながら、ゆらゆらと消えてしまいそうです。
「……まずいな。もうじき夜になる。こうしちゃいられないぞ！」
　と、ププは言いながら、妙にはっきりとしない頭を振るわせ、立ち上がろうと足に力を込めた途端、
「――っ？！」
　鋭い痛みがププの体を雷光のように突き抜けました。それと同時に、ププは焦りと共に、危機感が胸の奥底からじわじわと薄紙に水を垂らした時のように沸き上がってくるのを感じました。

「こ、この足の痛み……。もしかしたら、骨が折れてるのかもしれない。どうしたら……」
ププの頭の中はまた困惑し始めました。こんな足の状態では、ここから元の場所に戻ること――丘を登って行くことなんて出来るハズもありませんでした。ポポとは、日が暮れる前までに落ち合う約束でした。空を見ると、日が暮れるまで、あと1時間もないくらいです。
足を押さえながら空を見上げたププは、焦りと苛立ちを交えた気持ちを吐き出すように、大きくため息をつきました。どうしてあの時、もう少し注意深く周りを見ていなかったのか。狩りの時や山を登る時には、険しい崖には十分に注意することが第1条件なのに……。
「ぺぺ、ポポ。2人ならこんな時どうするかなぁ……」
ププは助けを求めるように、か細く呟きました。しかし、その呟きは、すぐに穴の空いた風船のように縮んで消えてゆきました。まるで、今のププの気持ちを表しているかのようです。
「……いや。こんな時だからこそ、自分でどうするか、何をするか決めなきゃいけないんだ。いつまでも誰かに頼っていたんじゃあ、僕はいつまで経っても誰かを頼ってしまうような、弱い僕のままなんだ！」
ププは頭を小さく振り、きつく奥歯を噛み締めながら、目に輝きを灯しました。それから、弓矢と一緒に背負っていた皮袋の中から、清潔な白い包帯を取り出しました。それはぺぺお手製の包帯でした。
「ププはドジで間抜けで、すぐに怪我をするんだから、包帯くらいはいつも持ってなきゃ駄目なんだよ！」
ププは包帯を取り出しながら、ぺぺの言葉を思い出していました。ぺぺはいつも、ププにお節介を焼き、いつまで経っても一人立ち出来ない子供を見守る母のように、色々と役立つ道具を持たせていたのでした。
鋭い痛みに耐えながら、長い時間をかけて、ププは苦労して雪に

埋まっていた体を雪の中から出しました。痛みが走る足を伸ばし、防寒用の皮ズボンをめくって素肌をさらします。ちょうど左手足の脛の辺りが赤く腫れていました。

ププは苦虫を噛むような顔で、足を固定するように包帯をきつくきつく巻き始めました。単なる応急処置でしたが、何もしていないよりは、幾分か痛みが和らいだような気がします。

「……よし。次は、ピピ。もうじき夜になるから、防寒用の簡易イグルーを作ろう。と言っても、ここら辺の雪は柔らかいから、イグルーと呼べる程のものは作れないと思うけど、とにかく、何も無いよりはマシだからね」

ププはピピに、ここら辺一体の雪を踏み固めることと、ププとピピが入れる程の穴を掘ることをお願いしました。長い間一緒にいたので、ピピはププの命令はよく聞いていました。ププは足を使って歩いたりすることは辛いので、手を使いながら一緒に穴を掘っていきます。

辺りが薄暗くなってくる頃、汗水を額に浮かべながら息を切らしていたププは、ようやく小さな雪の空洞を作り上げることが出来ました。それはイグルーとは呼べない程の小さな小さなもので、ただ雪を掘って空洞を作り、その周りをピピが固めた雪で囲うという質素なものでした。

夜になると、気温は放物線を描くようにぐっと下がり、誰のものでもないよく澄んだ星空もまた、お互いが寄り添うように、雪の大地を見下ろしていました。

簡易イグルーの中で角灯を灯し、ププは、痛む足を雪を入れた皮袋で冷やしながら、ただじっとしていました。ゆらゆらと頼り無さげに揺れる灯火は、それでもププの不安を焦がすようにチリチリと音を立て、微かな温もりと安心を生み出しているのでした。ピピは、そんなププにぴたりと寄り添い、小さないのちの温もりを与えてくれていました。

「ピピ。君がいてくれて良かったよ」と、ププがぽつりと呟きます。

「明日の朝になったら、とりあえず元の場所に戻って、みんなの所に帰らなきゃ……。ポポ、僕が約束の場所に戻らなかったから、心配してるだろうな」
ピピは耳をぴくりと動かし、ププの目を見ながら、小さな顔をすり寄せて来ました。
角灯とピピの温もりのお陰で、ププは額がじんわりと汗ばんでいることに気が付きました。極寒の夜と言えど、ピピが一緒にいたことで、ププは安心して体温が上がったのでしょうか。ププはかぶっていた毛皮のフードを頭から外して、手元に置きました。
すると、ピピはそれをすぐに素早く口にくわえてしまいました。
「あ、何するんだよ、ピピ！」
ププは悪戯するピピから毛皮のフードを返して貰おうとそれを掴みましたが、ピピはなかなか離そうとはしませんでした。ピピは毛皮のフードをきつくくわえながら、何か悲しそうな、切ないような表情をしています。
「それは、僕が初めて狩りを成功させた時に捕まえたカリブーの毛皮で作ったものだよ。……確かに、君の仲間の毛皮だよ」
と、ピピを見ながら、ププは思わず顔を曇らせます。
「……どうしたんだい？　そんなにこの毛皮が気になるのかい？」
ピピは困ったような表情をしながら、ププの毛皮のフードをしっかりとくわえていました。
「この毛皮は確かに君の仲間のものだけど、それ以外は君とは関係がない――」
そこでププは、今のピピの行動と記憶の中のある光景が、ジグソーパズルの1欠片がはまって繋がるように、頭の中に広がりました。
ピピが何故、ププの側にいつも寄り添っているのか。何故、ププと一緒に狩りに来てしまったのか。そして何故、あの吹雪の日の夜、ポポと一緒に吹雪の中、無事に帰って来ることが出来たのか。
ピピの行動の意味が、今ププの中で1つに繋がり、はっとしました。そしてそれは、ピピはおろか、ププにとって余りにも衝撃的な

事実でした。普通では考えられないような事実ではあったけれど、ププはそう考えることしか出来ませんでした。
「まさか……。そんな……。ピピ、もしかして君はあの時の……？」
ププは思い出します。先程見た夢の光景、記憶の中の光景を。
3年前、ププが狩った大人カリブーの側にいた、生まれたばかりの子供カリブー。そして、その大人カリブーを何も考えることなく殺めてしまった自分。
それは、間違いなく――。

「……ずっとお母さんを、探していたのかい？」

……ププは、今まで孤独に生きてきたピピの心の内を想いながら、声を出さずに涙を溢しました。
角灯の灯火は、儚い夜の間ずっと、ゆらゆらゆらゆら、心を濡らすように揺れているのでした……。

第8話　いのちの答え

東の空がうっすらと朝もやを伴いながら白くなり始めた頃、ププはピピと共に、まだ痛む足を引きずりながら、既に北へと向かっていました。夜明けと共に、ププは行動を始めていたのです。

良く晴れた夜の次の日の朝は、とてつもなく気温が下がることを、経験的にププは知っていました。いくらピピと一緒にいるとは言えど、角灯1つきりでは、そのまま眠っていると凍死さえしかねません。そう思ったププは、気温がぐっと下がる朝方より前に起き出し、体を動かし始めていたのでした。

昼間はププが先陣をきって前を歩いていたのですが、足を引きずりながら歩く今の彼は、ピピにすぐに先を越されてしまうのでした。少しずつしか歩くことが出来ないププは、肩で息をしながら、ピピについてゆくことが精一杯でした。先を歩くピピは、そんなププの様子を伺うかのように、立ち止まりながら彼を見ていました。

ピピはププの毛皮のフードを首に巻いていました。そのため、ププは持参していた包帯や皮袋を活用して、簡素な帽子を作って、それをかぶっていました。少々不恰好でしたが、この厳しい寒さには勝てません。

空が明るくなるにつれて、気温はぐんぐんと冷え込んでゆき、ププとピピの吐く息さえもが、白い氷の粒となって固まっていくようです。左手に見える小さな川からは、白い湯気が立っていました。

それでも、その厳しい程の寒さに挫(くじ)けることはなく、ププは重い足を引きずりながら、どんどんと進んで行きました。

やがて太陽が山脈の中から顔を覗かせる頃、ププとピピは、崖の中腹程までなんとか辿り着いていました。

息を切らしながら歩くププの、常に5歩くらい先で、ピピは心配そうに彼のことを見つめながら、振り返り振り返り様子を見ていました。

「大丈夫だよ、ピピ。どうやら、この足は骨が折れるまで重傷じゃなかったみたいだ。僕はまだ運がいいみたい。……ごめん、でも、ここで少しだけ休むよ」
ププは力なく笑いながら、ふぅと大きく息をつき、軟らかな雪の上に荷物を置き、座り込みました。水筒に入れてあった水を飲み、額から滝のように流れる汗を清潔な布で拭きました。
「崖の下から歩いてきて、やっと半分くらいかなぁ。お昼頃までには、なんとか来た道まで戻れそうだよ。ふぅ……」
ププが長々と息を吐ききるのと、ピピが何かに気付いたのは、ほぼ同時でした。
ピピは耳をそわそわと四方八方に動かして、何かに警戒しているように、緊張した面持ちで辺りの様子を伺っていました。ププも、ピピが感じた小さな違和感に気付きました。
「……なんだ？」
ププにはよく聴こえませんでしたが、それは確かに何かの音でした。しかし、ププにとってはあまり耳慣れない音だったので、それが何かを理解することが出来ませんでした。
それは空気が膨張するような、破裂するような音でした。余韻が近くの木々に積もっている雪を揺らし、細かな粒が辺りに漂いました。
ププは何やら胸騒ぎがして、ざわざわと皮膚の裏側が緊張し、不安の色が身体中に張り付くような感覚に陥りました。
「……今の音は……？」
張り付いた不安を取り払うように、ププはか細い声を絞りだしました。
後に残った音は、自分とピピの息遣いだけでした。白い息が出ては、冷たく澄んだ空気の中にゆっくりと消えて行きます。
すると突然、ピピがその場からププが向かいたい方向とは別の方向へと走り出しました。
「ピピ！　待つんだ！」

ププは思わず甲高い声で叫びます。しかし、ピピはププが制止するのも聞かずに、雪けむりを立てて走り去って行きます。焦ったププは、痛む足をずるずると引きずりながら、必死にピピを追いかけ走りました。

ところが、１００ｍ程進んだ岩の陰で、ピピはぴたりと立ち止まってしまいました。そこまでやって来たププは、ピピの目の前にあるものを見て、息が止まる程に驚愕しました。

「か、カリブーが……」

呼吸をするのも忘れて、ププは目の前の存在を凝視しました。そこにあったのは、もう二度と動くことのない大人カリブーが、ただ雪の上に横たわっているのでした。ププは言い様のない、くらくらと目眩がするような既視感を覚えました。それは先日、ポポと一緒に見た、狼の亡骸と同じような光景だったからです。

しかし、そのカリブーの亡骸には、狼の時とは決定的な違いがありました。それに気が付いたププは、狼が不自然に死んでいた理由も、ポポが別行動した理由も、ようやく全て理解することが出来ました。そうすると、怒りと悔しさが苦い胃液が込み上げてくるように喉の奥まで上がって来て、ププは拳を強く強く握り締めました。

ピピが恐る恐る近づくのを見たププは、

「ピピ！　触っちゃ駄目だ！！」

と、山にこだまする程の大きな声を出しました。きんきんと耳障りするような自分の声に、ププは立ちくらみがしました。思わず、吐き気もします。

「……触っちゃ、駄目だ」

もう一度、今度は、小さく消えるような声で言います。目がチカチカして、まともにその光景を見ることが出来ませんでした。

ピピは、困惑するような顔でププと雪の上のカリブーを見比べ、何かに怯えるようにププの後ろへと寄り添って来ました。

ふと顔を上げると、ププは少し離れた切り立った岩肌に、小さな洞穴のようなものがあることに気が付きました。洞穴の周辺には、

カリブーのものでもない、狼のものでもない、不自然な黒い足跡がたくさんありました。
「――くれぐれも無茶をしたり、早まった真似だけはしないでほしい」
ポポの言葉が、ププの脳裏に反芻しました。しかし、ププは、その言葉を胸の奥底にしまい込むように、奥歯を噛み締めました。
「……ポポ。ごめん。約束は守れそうにないや」
言葉を1つだけその場所に残すと、ププは背中の弓矢をしっかりと確認し、足のつま先を、真っ直ぐ洞穴の入口へと向けるのでした。

その洞穴の中は、まるで世界からその場所だけ切り離されたかのように、時間がゆっくりと流れていました。
そこは薄暗く、冷たいようななま暖かいようなべっとりとした風が、奥の方からププとピピを誘うかのように流れてきます。ムーおじさんが住んでいるような人工の洞穴ではなく、天然の岩肌が連なり、人が住んでいる気配はまるでありませんでした。
しかし、ププとピピは、何かただならぬ気配を感じたため、息を潜め、足音を立てないように、すり足で歩いていました。ププは、背中にある弓矢をいつでも握れるようにしながら、です。
やがて、洞穴の奥に辿り着くか着かないかの場所に来ると、岩の先からは水が滴り落ちる音と共に、何やら人の話し声が聴こえてきました。ププは、心臓がどくんと脈打つのを感じました。
「……しかし、楽な仕事だよな」
それは確かに大人の男の、低く力のある声でした。ププとピピは、岩の影に身を潜めて様子を伺います。
洞穴の一番奥の、わりと広い空洞のスペースの中に、炎を焚いて暖を取っている3人の男たちがいました。ゆらゆらと揺れる光陰が、ププの顔を撫でてゆきます。
「ここら辺の土地には、野生のカリブーや、狼やらがうじゃうじゃいやがる。仕留めて持ち帰れば、カリブーの角や狼の毛皮なんかは、

結構高値で取引されるからな。比較的、楽に金が手に入る。未開の土地だから、誰にもバレやしないぜ」
男の1人が薄気味悪く微笑みながら喋っています。その手には、大人のカリブーの大きな立派な角の一部が握られていました。それを見たププは、思わず目を見張りました。
「金が手に入れば、俺たちは生きていける。美味いものも、美味い酒も手に入るってわけだ。くっくくく」
男は鼻で笑うと、もう片方の手に持っていた容器を口に運び、旨そうに飲み干します。
「……でもよぉ、いくらなんでも?あれ?を使うのはまずいんじゃねぇか？　確かに弓矢とは違って、楽にカリブー共を仕留められるけど、前に聞いたことがあるぜ。?あれ?で仕留めた動物の腐肉を喰らった動物もまた、しばらくの間、喘ぎ、もがき苦しみながら命を落とすらしいぞ。ここら辺に住む人間たちの生活をも脅かしてまで、俺たちがやることなのか？」
カリブーの角を握った男の目の前にいる、わりと若いひげ面の男が、何やら不安そうに話しています。
「わかってないな、新入り。俺たちもまた、誰かによって、自分たちの生活が脅かされているんだよ。やらなきゃ、生活出来ない。生活出来なきゃ、のたれ死にだ」
その男に対して、隣で黒光りする細長いものを持った、はげ頭の男が言葉を挟みました。
ププはその男が持つものを目にして、胸が詰まるほど、驚きを隠せませんでした。
「あれは……。ムーおじさんに聞いたことがある。一度放てば、体中に恐ろしい毒が回って、動物たちは絶対に助かることがないって。そうか。やっぱりそうだったんだ。さっきのカリブーや、狼が死んでいたのは――」
「おやおや。勇ましいお坊っちゃんだな」
え？　とププが思い、後ろを振り向こうとした瞬間には、首の後

ろ辺りに何かを思い切り振り下ろされ、ププの意識は闇に溶けてゆくのでした。

天井の岩から滴り落ちる水が、ププの首筋を濡らします。ププは、う、と呻き声を上げながら目を覚ましました。

「早い目覚めだな。さすがはこの厳しい土地で狩りをしているだけのことはある」

声によって現実に引き戻されたププは、それと同時に自分が手足を革のロープで縛られ、身を動かすことが出来ないことに気付きました。頭の後ろがズキズキ痛み、視界が少しばかり歪みます。

「……お前、足を骨折とは言わないまでも、結構重い怪我しているな。その足でこの雪山をうろつこうなんて、神経がイカれてるとしか考えられないぜ」

目の前には、４人の男がいました。その中の、若いひげ面の男が小さく笑いながら言いました。

ようやく意識がはっきりしてきたププは、先程、岩の影から覗いていた時より、男の人数が増えていることに気付きました。手にカリブーの角を持っていた男、若いひげ面の男、はげ頭の男の他に、ププを殴り付けたであろう体の大きな屈強な男が加わっていました。ププを殴り付けた男が、この中ではリーダー的な存在なのだろうと、ププはすぐに気付きました。

「お前たちは……、密猟者だろう」

ププは警戒しながら、低く小さい声で尋ねました。

「まぁ、世間一般で言えばそうなるな」

はげ頭の男がにやけながら答えます。

「俺たちは金がない。あるのは、こんな卑怯で薄汚れた武器だけだ」カリブーの角を持っていた男が、口許をだらしなく緩めて話しながら、先程と同じく黒光りした銃をかざしました。「だからこそ、こうして必要最低限の力を使って、俺たちは狩りをしているのさ。合

理的だろう？」
「……僕たちは狩りには弓矢しか使わない」ププは顔をしかめながら言います。「それは、自然のものを使って、自然と共に生きてこそ、僕たちは自然の恩恵が手に入るからだと、昔から決まっているんだ。
僕の友達が言っていた。毒を仕込んだ銃弾をカリブーに撃つと、そのカリブーの肉を喰らった狼もまた、毒で苦しみもがきながら死んでゆくって。僕は昨日、狼の屍を見た。そしてさっきは、銃痕があったカリブーを見た。自然の流れに逆らった毒の連鎖が、動物たちを苦しめているんだ。あれは、お前たちの仕業だったのか」
ププは、４人の密猟者たちを射抜くように睨みつけました。
リーダー的な存在の男が、その瞳を振り払うように鼻で笑います。
「ふ。だからどうした？　俺たちは最初から、自然から見捨てられた人種なんだ。自然を喰い、動物を殺めることに、何の意味がある？　お前たちが弓矢を使って狩りをすることと、何が違うと言うのだ？」
リーダー的な存在の男が大袈裟に肩をすくめながら話しました。ププはその男の言葉に驚き、黙り込みました。
「……そうさ、そこに意味なぞ、答えなぞないのだ。人間という動物が生きているからこそ、自然を喰い続けているのだ。それこそを罪と呼ばずになんと呼ぶ？　総ては俺たち人間たちが、この世界で生きるための術でしかないのだよ。俺たちは自然の中で生きることをやめた、新しい人種なんだ」
「……違う」ププは首を振りました。「ムーおじさんは言ってた。自然の中に生きてる人間には罪はない、って。その中で生き続けることを拒むこと、それこそが罪だって」
ププは言葉を切り、密猟者たちを再び睨みつけました。
「……なんだと？」
ププの言葉を聞いたリーダー的な男が、眉を上げました。ププは続けます。

「――だから、お前らは自然と一緒に生きてゆくことをただ怖れて、自然を捨てただけなんだ。お前らは生きるためにカリブーを捕まえているんじゃない。勿論、新しい人種なんかでもない。私利私欲の為に、無駄に罪のない命を奪っている、ただの臆病者たちだ。自然と闘うことをやめて、能々と楽をして生きているお前らに、いのちの大切さなんて絶対にわかるハズもないんだ！」

ププは吠えるように言葉を密猟者たちに放ちました。言葉を放ち終わると、ププははぁはぁと肩で息をしていました。

「このガキ……。痛い目を見ねぇとわからねぇらしいな」

密猟者の1人、銃を持った男が恐ろしい形相をして、ププの方へ近付いて来ました。そして、銃を頭上に構え、ププへと振り下ろしました。ひゅ、と風を切る音が聞こえ、ププは思わず目をつぶりました。

しかし、一呼吸おいても、痛みは走りませんでした。代わりに、銃を持っていた男の呻き声と、ガシャンという何かが地面に落ちる音が響き渡りました。

「なかなか素晴らしい演説だったぞ、ププ」

「ムーおじさん！　それに、ポポも！」

ププや密猟者たちがいる場所の入り口には、弓を構えたムーおじさんとポポの2人が立っていました。

ププを殴ろうとした密猟者は、ムーおじさんが放った矢によって、銃を持っていた腕を射抜かれたのでした。血が滲(にじ)む腕を、苦しい顔をしながら、もう片方の手で押さえています。

「なんだ、てめぇらは！」

はげ頭とひげ面の密猟者が唾を撒き散らし叫びながら、ムーおじさんに掴みかかります。

しかし、ムーおじさんは弓を放り出し、今まさに掴みかかろうとした密猟者の手を目にも止まらぬ速さでひらりとかわし、気付くと、2人の密猟者たちは地面に強く投げ飛ばされているのでした。

「うぐ……」

「つ、つえぇ」
ムーおじさんは息を切らすこともなく、残る1人のリーダー的な密猟者の方を鋭い瞳で睨みつけました。
「残るはお前だけだ」
「ふん……」
最後の男は、ムーおじさんの気迫に臆することもなく、勝ち気な態度でじっとしていました。
「観念するんだ。ムーおじさんは弓の腕も、格闘の腕も凄いんだ。お前1人だけではもう勝ち目はないぞ」
ポポは弓矢を構え、密猟者の動きを見ながら言いました。男は先程と同じように、大袈裟に肩をすくめながら答えます。
「知ってるさ。数年前に、数々の密猟者たちをことごとく捕まえてきた大陸の敏腕捜査官のモメ・ムーミマだろう？　そいつに目をつけられて逃げ仰せた密猟者たちはただの1人としていない」
男は鼻で笑いながら言いました。そして、後ろからおもむろに猟銃を取り出します。
「……銃だ！」
「動くな！」
ププとポポがほぼ同時に焦りを混ぜた声で叫びました。
しかし、男は取り出した猟銃をムーおじさんの前へと投げました。
「なんのつもりだ？」
ムーおじさんが眉を上げ、不思議そうな顔をします。
「俺たちを捕まえるんだろう？　だったら、お前ほどの相手に無駄な抵抗はしない。大人しく捕まってやるよ」
男は手を上げ、勝ち気な態度を崩すこともなく、その場所にどかりと座り込みました。その姿に卑しい気持ちは、微塵も含まれていないということは、ププにもわかりました。
そこでようやくムーおじさんは警戒を解き、ポポも弓を下ろし、ほっと息をつきました。
ポポは、ププの側へと行き、ププを縛る革のロープをほどき始め

ました。
「全く。あの場所でいつまで待ってもププが来る気配がないから、すぐにムーおじさんの所に戻って、一緒にププを探していたんだよ」と手元を動かしながらポポが言います。「まぁ、でも、ププも見つかったし、ボクがずっと探していた密猟者たちを見つけることが出来たから、結果的には良かったんだけどね」
「……ポポ。ごめん」
「いや。謝るのはボクの方だ。ププにも密猟者の存在をきちんと知らせておくべきだったんだ。ピピに助けられたあの吹雪の日も、この密猟者たちを見つけたんだけど、逃げられてしまったんだ。まさかププがこの密猟者のアジトまで突き止めるとは思ってもみなかったから。ごめんよ、ププ」
ポポがププに対して、深々と頭を下げました。ププはそれに戸惑い、何を言えばいいものか、わからなくなってしまいました。
丁度そこへ、ピピが静かにププの側へとやって来ました。ピピも密猟者たちに捕まったものの、どうやら何も危害を与えられている様子はなく、ププはほっとしました。ピピはププの頬に顔をすりよせてきました。
「坊主」
と、突然、ムーおじさんにロープで縛られた密猟者たちのリーダー的な存在だった男が、ププに話しかけてきました。ププは顔を上げます。
「ププ、と言ったな。お前に聞きたいことがある」
「な、なんだ？」
「お前はさっき、自然の中に生きる人間には罪はない、って言ったな。そのポポという小僧が言っていたその日、この子供カリブーに怪我を負わせたのは俺たちだ。しかし、見たところ、その子供カリブーに親はいないようだが？　自然の動物たちを狩って、そんな風に親を亡くした動物たちは、人間を恨んでいるとかは思わないのか？　お前こそ、いのちの大切さを理解していないのではないのか？」

男の痛々しい質問に、ププは黙り込み、奥歯を噛み締めながら、ピピの方も見ました。ピピはきょとんとした顔をして、ププの方を見ていました。

ププは一呼吸置いてから、つなぎつなぎで言葉を発しました。

「確かに、ピピの大事な親を奪ってしまったのは、……この僕だ」

ププの突然の告白に、ポポは驚いてムーおじさんの方を見ました。ムーおじさんはただ黙って頷き、ププの方を見つめていました。

「……いのちの大切さなんて、今まで全然考えたこともなかった。でも、こうやって、ここにいる子供カリブーのピピと一緒に行動して、長い冒険して。苦労したり、新しい発見をしたり、力を会わせたり、そうしていくうちに、僕は僕なりに、いのちの大切さを学んだような気がするんだ。学んだと言うか、ピピが教えてくれたと言うか……。ピピの気持ちはわからないけれど、もしかしたらピピは僕のことを酷く恨んでいるのかもしれない」

ププは震える言葉を一度切り、顔を曇らせ、うつ向きました。しかし、でも、とすぐに言葉を出しました。

「でも、ピピは……。ピピは、僕の大事な友達だ。

だから――」

「ピピと一緒にこの大地でずっと生きていくこと。それが僕のこの大切ないのちのために、僕が生きていく答えだ……！」

ププは真っ直ぐと男の瞳を見据えながら、自分の真っ直ぐな思いを吐き出しました。

ポポも、ムーおじさんも、密猟者たちも、ただ黙ってププの言葉を受け止めていました。しばしの間、ププの言葉によって重い沈黙が落ちました。やがて、

「ふん」

と、男は沈黙を振り払うかのように鼻で笑うと、ムーおじさんに連れられて、密猟者たちは洞穴の外へと向かって行きました。
「さぁ、表でペペが待ってる。行こう」
ポポも洞穴の外に出るように、ププを促しました。
「え？　ペペも来てるの？」
と、ププは思わず声が裏返る程、驚いた表情をしました。また無茶したから怒られる！　と思っているのかも知れません。
「うん。ププがいなくなったって聞いて、体調が悪いのもお構いなしに、ベッドから飛び出したんだ。よっぽど、ププのことが心配していたのかなぁ？」
あはは、とポポが目を細めながら笑います。
「あ、そうだ。ペペへのお土産の、雪苺があったんだ……！」
ププはふと革袋に入れたあの果実を思い出し、お土産を貰う子供のような嬉しい顔をしながら、袋から取り出しました。
しかし、その雪苺は、ププがいろいろと無茶をしたせいなのか、無惨にも潰れており、もう食べられるような状態ではなかったのでした。

第9話　涙の物語

洞穴の外へとププとポポが出た時には、淡い色を放つ太陽が、西の空に溶け込もうとしていました。雪の大地は橙色に染まり、反射する光はきらきらと涙を溢すように、悲しさを伴った優しさを奏でていました。

「ポポ！　ププ！」

ペペが2人とピピの姿を見つけると、すぐに近寄って来ました。

ププはペペの顔を見るやいなや、ピピとポポの影にさっと身を隠し、決まりの悪そうな顔をしながらうつ向きました。

「ペペ。ププは無事だよ。ちょっと足を怪我しているみたいだけど、なんともない。ほら、ププ」

ポポはそう言うと、うつ向いたププを引っ張り出し、ペペの目の前に行かせました。ピピもププの背中を押しています。

ペペの前に出たププは、もじもじと頭の中で言葉を繋げながら、静かな声で言います。

「あ、ペペ。ご、ごめんよ、心配かけて」

「……」

ペペはププの言葉には反応せず、ただ唇を噛みながら、じっと針を指すような眼差しでププを見つめていました。

「怒ってる、よね？」

ププはおろおろと、ペペの目を見つめます。その目はなんだか、今までのププが起こした数々の行動で怒った時よりも、はるかに怒っているようにも見えました。

「ご、ごめんよ！　あ、あのさ、ペペのために雪苺を見つけたんだけどさ。雪山を歩いたり、転んだりした時に、潰れちゃったみたいで。せっかくペペのために取って来たのに……」

「そんなことはどうでもいいの！」

ペペが突然、大きな声を出しました。ププはひぃ、と情けない声

を出しましたが、ペペの声はかすかに震えていました。
「……怪我は、大丈夫なの？」
ペペは潤んだ瞳でププの顔を見ながら、優しく尋ねました。
「う、うん。大丈夫だよ」
ププがそう答えると、ペペは小さな鼻をすすりました。喉の奥まで出てきた何かを、もう一度飲み込もうと我慢し、奥歯を噛み締めました。しかし、とうとうペペは我慢しきれずに、潤んだ瞳から氷の粒のような涙を、ポロポロと溢(こぼ)し始めました。今まで抑えていた感情がとめどなく溢(あふ)れ、堰を切ったように、涙が次から次へと流れてきます。
「バカ、バカッ！　ホントに、ホントに心配したんだから……。そんなになるまで無茶して、動けなくなる程の怪我をしちゃったら、どうするのさ。雪苺なんか、食べられなくてもいい。カリブーの狩りなんか成功しなくてもいい。私の風邪が悪くなってもいい！　ププが、ププが無事に帰って来なかったら、私……。うわぁぁん」
ペペは涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにしながら、大きな声を上げて泣き始めました。泣き声は、夕焼けに染まった大地を揺りかごのように揺らし、悲しみが次から次へと流れ込んでくるかのように、じんと響き渡っています。
ピピもペペの涙に共感したのか、やるせないような、悲しいような、そんな声を洩らしました。
「……ペペ……」
ププはペペの涙で胸がいっぱいになり、同時に胸に何か骨のようなものがつかえたみたいに、とても苦しくなりました。飲み込もうとすればする程それは増えていき、息苦しさがププの体を包みこんでゆくみたいでした。
ププは瞳に溢れてきた涙を湛(たた)え、それを堪えながら、ペペのくしゃくしゃになった顔を綺麗な布で拭きました。
「ありがとう、ペペ。僕はもう無茶はしないよ。決めたんだ。みんなでずっと一緒に、この大地で生き抜いていくことを……」

ププは真剣な眼差しでペペの顔を見つめました。ペペは、そのいつもとは違うププの顔に、思わずどきどきしてしまい、何も言葉を出せずにいるのでした。
「ペペの涙が見れるなんて、これがきっと最初で最後だなぁ」
ポポがあははとからかうような笑い声を立てると、
「なによぉ……」
と、ペペが真っ赤な目をしながら、恥ずかしそうに不平を洩らしました。
そのやり取りを見届けていると、密猟者たちを捕まえたムーおじさんが、すぐ向こうからやって来るのが見えました。密猟者たちはムーおじさんが呼んでいた大陸の警察官に預けられ、これでもう、この大地を蝕んでいた連鎖はなくなるのでした。
ププは湛えた涙を拭い去り、
「さ、みんなで家に帰ろう！」
と、元気に叫びました。
それに答えるように、小さな子供カリブーの鳴き声が、夕焼けの大地の中に高らかに響き渡りました。

【おわり】

第9話　涙の物語（後書き）

初めて、1つの物語を完結させました。

最後の方は無理矢理終わらせた感が、最高にあります。何しろ、小説の投稿に間に合うように、無理矢理終わらせましたから（笑）

この物語は思いつきの物語で、ろくに人物設定やら世界観設定をしないままに、本当に思いつくままにつらつら書き続けていたので、矛盾点がたくさんあるかと思われます（苦笑）

一応、伏線は全て回収したかと思うんですが、回収しきれていなかったらすみませんm（__）m

僕の力不足です。

この物語で、何を一番に伝えたかったのか、それがたぶんあやふやになっちゃった気がしますね……。初めて作り上げた物語で、？いのちの大切さ？なんていう大それたテーマを使っちゃいけませんね（苦笑）

でも、自分が一番注目して欲しかったシーンは、そこじゃないんですよね。タイトル通り、この物語のテーマは、？涙？です。そこにどんな意味を持つかは、伏せておきます。って言うか、うまく描ききれてないし（＜＿＞）

さて。

とにもかくにも、自分の中で1つの物語を書ききったって言うのは、また言いますけど、これが初めてなんですよね！

だから、結構嬉しかったりもします（笑）

去年の８月くらいに思いつきで書き始めて、途中休息はあったものの、完結まで半年以上も要してしまいました。
大まかなストーリーは頭の中で出来上がっていましたが、それを頭の中で処理し、物語を繋げていくのは結構大変でした。
何しろ、人物１人１人を掘り下げていったら、物語がいつまで経っても終わらなくなってしまう。かと言って、３月３１日までに仕上げないと、小説の応募に間に合わない（＜д＞）
その葛藤と戦った末、最終局面になって、物語がまるでジェットコースター！　こんな物語をホントに応募して良いものか、頭が痛くなります。
時間がある時にそのうち、大幅な加筆・修正を行う予定です。
たぶん。
密猟者の１人１人に対しても、掘り下げてドラマを作りたかったし、ぺぺももっと物語に出演させたかったのですが、それやっちゃうと、短編が長編になってしまいそうです（笑）

とりあえず、ププとぺぺとポポ、そして子供カリブーのピピの物語は、一旦終了です。
こんな書き方してると、続編でもあるのかと言いたくなりますが、多分ないです（笑）
そもそもまだ、書きたい物語が山のようにあるので、この？Ｔｅａｒｙ　Ｔａｌｅ？が終わっても、すぐに新しい小説を書きたいと思ってます（＾－＾）
またどこかで、ププやぺぺ、ピピが現れるかも知れません。
その時はまた彼らを見守ってあげて下さいね（＾・＾）

平成２１年３月３０日。
真辺よっぴー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4984i/

Teary Tale

2010年10月8日15時26分発行